

3人の 三角関係

作：苑田公乃

麻「私、辞める事にした」

望「何を止めるの？」

麻「会社」

望「えっ!？」

奈「先を越された」

望「ええっ!!!？」

奈「いつ辞めるの？」

麻「今日を限りに」

望「そんな話、聞いてないわ！」

麻「課長も聞かされてないよ（笑）」

奈「じゃあ、その計画は頓挫（とんざ）するわね」

望「計画にもなにも、、、。どうして辞めるの!？」

麻「じゃあ、テラちゃんは、どうして続けてられるの？」

望「・・・」

奈「私は、3月まではいると思う。課長面接でもそう言っておいたし、総務部も何かと楽でしょ。麻美もせめて

12月のボーナス貰ってから辞めればいいわよ」

望「ダメよ!もう10月よ？」

麻「会社に忠実にしてたって、損するばっかじゃん。ま、今日辞めるけどさ」

望「奈々子は、どうして辞めるのよ!？」

奈「辞めない人には分からないかもね」

望「二人とも、どうしちゃったのよ!」

奈「自分こそ、秘書室の異動は肩叩きだと言っておいて、、、。まあ、頑張ったらしいと思うけど」

望「二人とも、いつから辞める気だったの!？」

麻「とっくの昔からだよ。四捨五入して30歳の内になって思ってた」

望「どうして言ってくれないのよ!」

奈「う〜ん、、、。自分でも辞めた後の自分を想像できないからかな??？」

望「辞めた後の身の振り方も考えてないの!？」

麻「テラちゃんさあ〜、なんか私らを責めてるわけ?責められる理由ないと思うけどな。こっちだって一大決心

なんだよ?」

望「責めてないわよ!びっくりしてるだけよ!」

麻「私も奈々子まで辞めるとはびっくりだよ」

望「ホントに、辞めてどうするのよ!？」

麻「バイトかな」
望「この歳でバイトって、、、」
麻「あ、今、日本中のフリーターの皆さんを敵に回したね」
奈「世界中じゃない？（笑）」
望「笑い事じゃないわ！」
奈「そっちこそ、小市民的な考え方なんじゃないの？」
麻「よそうよ。久しぶりで3人顔揃えてのランチなのに」
望「二人が心配だわ」
奈「分かるわ。自分でも自分が心配（笑）」
望「茶化するのね、、、。本気で言ってるのに」
麻「私も本気で言ってるから。多分、奈々子もね」

温めたプレートで出してくれる洋食屋で、奈々子の白身魚も、麻美のハムカツも冷えていなかった。望のオムライスの卵は、外側から冷え始めていた。

麻「奈々子～、私カッコ悪い～」
奈「ダメだって？」
麻「来月に辞めていいって」
奈「じゃあ問題ないじゃない。別に次の仕事決まってないんでしょ？」
麻「そりゃそうだけど、、、」
奈「12月まで我慢できないの？」
麻「嫌だとなったら、後一日でも嫌だ」
奈「バイトで苦勞して、そういう性格も直すといいわ」

フラストレーションが溜まる。フッチーにも内線かけちゃえ。

麻「フッチー、今いい？」
藤「どうした？」
麻「望、思った通り怒ったよ」
藤「目に浮かぶ（笑）。で、課長にも話した？」
麻「うん。渋い顔してた。でも、来月辞めていいって言ってくれた」
藤「麻美は長くいるから課の戦力だし、さしたる理由もなく辞めるとなると課長の立場もね」
麻「どうして辞めるのか聞かれたから、この制服着るのにもううんざりですって言っちゃったのに、、、」
藤「あはは、、、。それ、課長にも言っちゃったの？」
麻「決意の程を見せようと思って、、、」
藤「人に言っちゃダメだよ（笑）」

麻「奈々子にも言ってない」

藤「そうそう。これから特に会社って後ろ盾が無い社会で生きてくんだから、賢く立ち回って」

麻「今日も残業？」

藤「飲みに行く？」

麻「いいの？」

藤「こうして話しているよりマズくないよ（笑）」

麻「ごめん、、、」

藤「気にするなよ。麻美は人生の転機にいるんだからさ。応援するよ。終業時間キツカりは無理だけど、そっち

も残業しながら待ってて。電話する」

嫌だなあ。明日も朝起きて、ああ、今日も会社かあって思うなんて、、、。1ミリも楽しくないから、会社を辞めてもむしろ更に悪い事になるって考える方に無理があるでしょ！辞めるか辞めないかじゃない。辞める？辞める？辞める！だよ、全く～！選択肢は、辞める、のみ！いざ、鎌倉！ってどの武将が言ったんだっけか、、、。そもそも、武将が言ったのか？？？ま、いいや、どうせすっかり気分が萎えた、、、。

*のっけから、会社を辞めるという麻美（と、奈々子）で、続編スタートです。辞める理由ってこんな程度なの

でしょうか？何かあったのでしょうか？藤野は、相変わらずイイ奴ですね。麻美と奈々子の今後もですが、

おいてけぼりの望もどんな行動を取るか、、、。秘書室の異動？？？次回、そのあたりが描かれるでしょう。

乞う、ご期待！

朽葉色（くちばいろ）の望

笹「お電話換わりました、笹木です」

望「手羅です。ご無沙汰しています、、、。まだ残業していらっしゃる気がして、、、」

笹「久し振りですねえ。こちらは、そう（笑）、残業中です。お元気でしたか？」

望「・・・」

笹「もしもし？今、どこです？」

望「以前お会いした公園です、、、」

笹「そうか、、、。なら、ちょっと抜けられると思いますのでそこにいて貰えますか？ただ、5分程度で申し訳

ないのですが、、、」

望「すみません、、、」

とうに秋の陽は落ちて、渋谷の喧騒から遠いこの公園の街灯は侘しかった。ひと気はなくて、枯葉の音が心細い。都会に無理やり作った公園なのだろうか。細長くてなんだか公園と呼ぶには情けない感じだ。ふらふらと来てしまった。迷惑なだけだろうけど。

笹「お待たせしました（息を弾ませている）。何かあったんですね？営業先との大きなトラブルとか？」

望「（苦笑）今は営業じゃないんです」

笹「！？じゃあ、今は？」

望「秘書室です」

笹「秘書室なんてありましたっけ？」

望「（苦笑）曖昧なのがあるんです」

笹「業務が厳しいとか？」

望「（苦笑）いえ、むしろ遣り甲斐は無い位です」

笹「それは、人事のミスですね。手羅さん程の女性を有閑職になんて。失礼ですが、秘書の方は何人いらっし

やるんですか」

望「私を含めて3人ですが、元々2人で充分だった部署だと思います。2人は忙しそうにしています。あ、私に

はちゃんと親切ですよ」

笹「手羅さんは、そこでは何を？」

望「名前だけ会長秘書なんです。主に電話番です。パーティーの招待とか、あ、いえ、もっと固いものもあり

ますが、出席するかどうか会長に確認して先方に連絡するとか、鞆持ちとか」

笹「スピーチの原稿を口述筆記するとか、そういうのは無いんでしょうか。いえ、ボクは詳しく

ないですけど」

望「多分、あの2人がやっています」

笹「多分??？」

望「それやこれや、疎外感で一杯です、、、。神山課長も出向させられてしまって、、、」

笹「えっ!？」

望「最後に残っていた同期の2人も会社を辞めると言い出して、、、」

笹「女の方ですね?ご結婚じゃないんですね、、、そうですか、、、なるほど、、、ちょっと、手を出して下さい」

望「???こうですか？」

笹「いえ、両手を。そうです。さあ、ボクの手を掴んで。息を吸って。まだまだ。いいです、もう一回。もうちょっと

大きくです。吐いて。繰り返して。そう、段々できて来た。どうです?少し楽になりました？」

望「分かりません、、、。すみません、、、」

笹「重症みたいですね、、、。じゃ、飲みに行きましょう！」

望「えっ!?!お仕事は!？」

笹「目の前で女の人が困っているのに?(笑)上着取って来ます。一人で待てますか？」

望「はい」

笹「すぐ戻ります。手羅さんはきっと大丈夫ですよ!自信を持って！」

おしまいの言葉が木霊する間に、彼の背中は見えなくなって、また一人になった。車の音が遠く近くに聞こえる。そうか、やっぱり重症なんだな、、、。

*笹木文人、見参!蛇足ですが、漢字変換キーで、見参は出ないですね~。

で、神山課長、出番なしか???

胡桃色（くるみいろ）の望

神「ハイ、神山」

望「手羅です、、、。業務中にすみません」

神「どうしたね？」

望「あの、、、私は平気です。だけど、本当に出向なさるんですか？」

神「おかしな子だね（笑）。回覧か掲示を見たから言ってるんだらう？手羅クンの異動と同じくらい決定した事

だよ」

望「だけど、、、そんなのって、、、」

神「悪い癖だぞ（笑）。どうしていつも自己評価が低いんだ？だから、人の事まで低く見てしまうんだよ？」

望「出向をバカにしてなんか、、、。あ、すみません、、、。だけど、やっぱり納得いきません」

神「う〜ん、しょうがない人だねえ（笑）。あのクライアントが厳しい先だという事は、君だって知ってるだらう？」

何かと呼びつけられるより、あっちに常勤の者がいた方がいいんだよ」

望「神山課長が行かなくなるとって、、、」

神「人の心配どころじゃないだらう（笑）。秘書室なんて、それこそ右も左も分からないんじゃないのか？」

望「そ、それは、、、」

神「これからも、いつでも、何かあったら相談して来なさい。うちにも来るといい。女同士がいいなら、私の妻に

話すといい。結構頼りになる筈だよ。いつか、剣道も見に来なさいね」

望「ありがとうございます、、、」

神「手羅クン」

望「はい？」

神「幸せになりなさい」

人事部からは、秘書室への異動の説明はあった。会長、社長、副社長とおられるので、やはり3名の秘書を置くべきだと決定したが、総務からは適当な人材を見つける事が出来なかった。新採用にも不安がある。兎に角、機密事項が多いからだ。有能で愛社精神がある手羅望でと満場一致。営業部としては痛い、トップの安定が社の安定。

私、信じない！

奈「望、大丈夫？」

望「ダメでも仕方ないじゃない」

奈「よしなさいよ、投げやりな言い方は。望らしくない」

望「神山課長がいなくなる」

奈「この世から消えるわけじゃないわ」

望「同じ事だわ！私のせいよ！」

奈「はい??？」

望「私が、営業部でちゃんとした働きが出来なかったから責任を取らされて」

奈「待て、待て、待て。飛躍してるわよ？」

望「神山課長が、優しかった、、、。絶対に変！」

奈「望には、いつだって優しかったわ」

望「そうよ！その神山課長がいなくなるのよ！」

奈「だったら、人事に直談判でも何でもしなさいよ。だけど、自分の心配もしなさいね」

望「神山課長が、幸せになれって（泣）」

奈「そうよ。あんたは、幸せになるのよ。飛ばされた神山課長の分もね。あんただけじゃないわ。私達全員、

出来る事で頑張るしかないの！」

男にとって、出世コースを外されるという事がどういう事か、望に騒がれなくても分かっているわ。でも、心の中で万歳を叫んでいるヤツらの声も聞こえる。特に、神山課長を面白くなく思っていた人達。会社には派閥があるわ。専務派、常務派。イチ社員の私には手が届かない世界だわ。届いたところで、どっち側についたらいいかも分からないし。なんだか潮時を感じるわ。自分の居場所のアテは無いけれど、ここじゃない事だけは確かだわ。ガラッと違う所に一度身を置くのもいいかもしれない。

そこでもなかった時の事を思うと怖いけれど、、、。

*光源氏が、明石の君への手紙を、胡桃色の紙にしたためました。黄褐色。

青鈍（あおにび・墨がかった青系凶色）の望

笹「センター街は若者に任せて、道玄坂にしましょう。ああ、ホントいけないなあ。ボクに掴まって歩いていい

ですよ？」

望「すみません、、、」

少し躊躇ったけれど、腕に掴まらせて貰ったら確かにずっと歩き易くなった。自分の足元だけ見て笹木について行くだけで良かった。

ファッションビルのエレベーターは狭かった。銀色の四方に自分の姿が映る。笹木は、階数を確認している。

和服の似合う女性が席に案内してくれた。笹木は低い声で、奥まった所をと頼んでいた。

4人用のベンチ席で、平たい座布団が乗っていた。

笹「奥に座って下さい」

笹木は、望を守るように通路側に座った。周囲は板張り。長い暖簾が下がり、完全に外から見えない作りだった。

笹「お酒、少し飲んでみます？」

望「分からない（涙）」

笹「じゃ、料理もボクが適当に注文しましょう」

慣れたように笹木は暖簾を持ち上げて、紺色の上下の男性を呼ぶと、幾つかの品をオーダーした。

笹「最近、ちゃんと食べてます？」

望「ええ。でも、言われてみると、長い事食欲ってものがなかった気がします」

笹「もっと早く連絡してくれれば良かったのに」

望「申し訳ないですから」

笹「さあ、何でも話して下さい。時間の事は気にしないでいいですから」

笹木が頼んでくれたのは、ロックの梅酒だった。とろり甘くて飲み易い、、、。

望「あ、、、」

笹「バカだなあ。こんな時までお酌の事なんか気にする事ないですよ。さあ、いいから。今夜は何でも聞き

ますから」

笹木に胸のつかえを語る内に、自分の心が整理されて来たように思った。藤野と麻美を本当は許せていない事。それ以前に結婚に失敗した自分に我慢ならない事。営業部で精一杯やってみたけれど、突然の異動命令が下り、加賀見達の余りにもあっさりした様子に傷付いた事。異動は、自尊心をガタガタにしたけれど、表向きは配属先が移ったというだけの事なので、ぶつけられない苛立ちがフラストレーションになっている事。柏木サンも真里チャンもいい人達だけど、目に見えないバリアーを感じる事。秘書の仕事は、やれてるんだかやれてないんだかさえ自分でも掴み切れていない事。密かに父のように慕っていた神山課長に恩を仇で返した形になっている気持ちが払拭できない事。何よりも、会えないとなると無性に会いたい事。麻美と奈々子が、自分を裏切って会社を辞めるように感じてしまう事。

笹「充分吐き出した？もっと箸も進めて」

望「ありがとうございます。くだらない話に付き合ったださって、、、。私も同じ日本酒を頂いてもいいですか？」

笹「や、ボク、結構ハイピッチで空けてますね（笑）。もう1本立つ位いいでしょう（笑）。今頼みますね」

望「私の話ばかりしてしまって、、、。笹木サンは、何か変わった事はなかったんでしょうか？」

笹「ボクなんか、な～んにも無いですよ（笑）。今日は、手羅サンがボクを思い出してくれたのが事件ですね

（笑）」

望「こんな話ばかりで、ごめんなさい、、、」

彼は笑うと少年みただ。私も20代に帰りたい。でも、思い切って会いに来て良かった。ご飯が美味しく感じられる。

笹「じゃ、そろそろ、、、」

望「あ！すみません！かなり遅くなってしまいましたね」

笹「たまには人に甘えるものですよ（笑）」

表通りに出ると、笹木は駅に背を向けて、道玄坂を登り始めた。望はいぶかしく感じながらも、酔い覚ましだろうと考えた。望としては、まだ別れたくない気分だったので、黙って腕を掴んで並んで歩いた。笹木が、はい、と肘を突き出したから。酔って足元が危ないのかもしれない事にした。次、いつ会えるか分からないんだし。月は見えなかった。それか、渋谷のネオンに隠れていた。

笹「手羅サン？」

望「はい？」

笹「ボクが、いつあなたに初めて好意を持ったか知ってます？」

望「！？」

笹「あなたの会社に初めて足を踏み入れて、神山課長から紹介されて、内心ボクは緊張でガチガチだった。

その時、ボクを鼓舞するような目で見守っている人に気付いたんです。あなたでした、
、。ボクの

勘は正しくて、その後も何かと気を配ってくれて嬉しかった、、、。ボクね、自分と特別な縁がある女性の

事は見分けられるんですよ？（笑）」

望「・・・（目を見開いている）」

笹「見分けさせてくれるでしょ？」

望「？」

笹木がいざなう先は、一段とネオンが眩かった。

*流れから言って、望が何ひとつ笹木に逆らえる気はしないですね～。笹木は妻帯者でしたよね。

弱っている女に手を出すのはいかんと思うか、もっと慰めてあげなきゃと都合よく(?)考えるか、、、。

が、望が逃げ出すかもしれず。いや～、お酒も入ってますしね～。

まあ、望はもっと不真面目になった方がいいとも思います。

退紅（たいこう）の望

望「麻美？あの、、、私、、、あの時は、ごめんね？」

麻「ヤダ！私がいけなかったんだよ！？テラちゃん、忘れられるはずないよね、、、」

望「ううん。私、將軍の正室以下だったのに（苦笑）」

麻「えっと、、、どういう意味か聞いていい？」

望「なんというか、、、フッチーは、ただの恋人だったのって事」

麻「ただの？響き、良くないよ、言える立場じゃないけど、、、」

望「ごめん。上手く言えない、、、」

麻「なんかあった？」

望「まさかの事があった、、、」

麻「???電話で話せる事？」

望「難しいかも、、、」

麻「う～ん、そっか、、、。今夜お泊りに行ってあげようか？」

テラちゃんって、思い詰めると落ち込み激しいからなあ。何があったか見当もつかないけど、まあ、聞いてから一緒に考えればいいや。

麻「エッ!!!あの笹木サン!？」

望「うん、、、」

麻「意外に大胆だったんだねえ～。いや、強引そうなトコあったか」

望「別に、無理やりじゃなかったわよ!？」

麻「どうするの？」

望「どうしよう？」

麻「じゃあ、どうしたいの？」

望「また会いたいの、、、」

麻「そりゃそうだよね～」

望「でも、もう会えないかもしれない」

麻「どうして？」

望「奥さんいる人だし、男の人って一回したらその女に興味失うでしょ？」

麻「笹木サンに聞いてみればいいよ」

望「聞いてみたの」

麻「嘘!?なんて!??？」

望「どうして?って、、、」

麻「なんだって言った？」

望「・・・」

麻「遊び、だとか?いや、そういう意味じゃないけどさ、、、テラちゃんが余りに魅力的だった

から自制できなか

ったとかさ？」

望「男だから、って答えた、、、」

麻「ハア！？何ソレ！女ったらしなセリフ！！！」

望「実際、すごく遊び慣れてる感じだった、、、」

麻「えっと、、、それって、内容、が、かな？？？」

望「何から何まで、、、」

麻「何から何まで、、、か、、、。それは、よしておいた方がいい相手だと思う」

望「どうして？」

麻「私がそういう人と関係したら、テラちゃんは何て言う？」

望「やめろって言うわね（苦笑）」

麻「自分で分かっているじゃん！結果が見えてる恋路を走るな！」

望「恋愛は、過程でもあるんじゃない？」

麻「私に当たるのはどうかと思うけど、いいよ、友達だから、、、。だけど、深追いはダメだよ？」

望「分かっている。こうして折角話聞いて貰っても、もう終わった恋かもしれないしね（苦笑）」

麻「もしも、だけど、、、奥さんと上手く行ってなくて別れる話が出ている場合は、そんな時だけは、飛び込んで

ネ！神山課長に言われたんでしょ？幸せになれって、、、」

望「こんなに誰かを好きになったのは初めてなの、、、（泣）」

麻「泣かないで。泣くのは早いよ。それに、幸せの涙を流そうよ、ねっ？」

*この色は、紅を洗い落としたような色です。身分の低い者が着用する服の色。

青白椽（あおしろつるばみ）の奈々子

私に欠けているものって何かなあ。考え事をするのは好きなので、実に暇な休日に思案に暮れる自分をやってみる。とっつきにくいて言われるなあ。が、麻美やテラちゃんみたいにも今更なれないし。スマイルか？うん、そうだな。足りてないな。しかし、私はクールビューティーで行きたいしなあ。いっそ、ゴージャスに？う～ん、それも面倒臭いなあ。全体的に面倒臭がり屋だな。うん、うん。そう言えば、この前の男と別れたのって何年前だっけか。いかん、忘れた、、、。つまり、って事は、、、ずっと恋愛してないな。今、新しい男が出来たとして、付き合っ、結婚は1年先になるとして、、、結構な歳になるな、、、。すぐ子持ちになるのも楽しくないから、ってなると、ハイリスク出産か？ひょ～！お尻に火がつくわ～。大体、私に育児？似合わない～～～。あ、そうか！この思考がいけないんだ！相手の精子の尻尾が切れたのばかりって事は大いにあるし、先の事はとりあえず、、、。よし！何ごととも経験だわ！ずっと独りは淋しいからねっ。

女「今日は、お互いに残念でしたね」

奈「あ、ええ、そうですね。（びっくり！誰？そっか、さっきの参加者か）でも、これって男性いなかったです

よね（笑）」

女「お見合いパーティーって初めてでしょう？（笑）」

奈「え？分かります？」

女「はい（笑）。私は何度か来てますから」

奈「私もあれですけど、、、あなたもそんな雑誌持っててちょっと変わった方ですよ（笑）」

女「映画、嫌いですか？」

奈「好きですけど、余分な物を持ってた女性はいませんでしたよ？（笑）」

女「誰もそこまで見てないですよ（笑）。私は母が勧めるから来ているだけだし。この髪も母が結ったんです」

奈「えっ？その気が無いのに来たんですか？」

女「今、付き合ってる人いますしね」

奈「へえ～。（この人、なんか変わってる。少なくともうちの会社にはいないというか、むしろ話が合いそう）」

女「飲茶して行きませんか？ホラ、その読めない漢字のレストラン（笑）」

奈「ホントだ（笑）。読めないけど、おシャレな店っぽい（笑）」

夜、彼女からメールが来た。映画の誘いだ。どうしようかなあ。一応、和正クンの意見を聞いてからにするか。

和「ちょっと待った！！！！行くって返事してないよね？！！」

奈「ダメ？」

和「その映画、エログロだよ！？」

奈「ゲゲッ！」

和「オレに電話してくれて良かった～」

奈「ハッキリしてるけど上品な人だったけどなあ」

和「その人、奈々子サンに気があるよ」

奈「は？？？」

和「とぼけないでいいよ。まめまめしく料理を取ってくれたとかさ、、、色々と怪しいよ」

奈「気持ち悪い事言わないでよ」

和「あ、オレにそういう事言うなら電話切るよ？」

奈「ごめん！和正クンを侮辱したわけじゃないよ」

和「ふん！ま、いいさ。慣れてるし。そもそも、その人を妙だと思ったからオレに電話して来たクセに」

奈「違うわよ！違う、、、って事にしておいてよ、、、」

和「ふふ。そういう正直なトコ、好き（笑）。ま、声かけて来た時点で気付くべきだったと思うよ」

奈「イチイチ疑ってたら、誰ともクチもきけやしないわよ」

和「その人は、ビシッと断りなよ？今すぐね。身体狙いだからね」

奈「何狙いか知らないけど分かったわ。しつこくされたら、また相談する」

和「大丈夫。こっちの人達って繊細だから、一回で察してくれる」

奈「和正クンは、結構しぶといじゃん？（笑）」

和「奈々子サン、そういう態度なら二度と髪切ってあげない！」

奈「わわ～っ！そろそろ伸びて来たのよ～！行ってもいい～～？」

和「明日なら早番だけど？」

奈「わ～い！でね～、皮から作った餃子が食べたい！」

和「この話の後で、オレに中華を作れってか？（怒）」

奈「ごめん、ごめん。じゃあ、えっと、、、チキンのハーブ焼き！」

和「買い物一緒にしてよね！あと、その人からNG出されたフリルたっぷりワンピースで来て！（笑）」

奈「やなヤツ、、、」

和「そんなオレが大好きだって、いつか言わせてやるからな！（笑）」

*この色ですが、多分、平安時代から天皇のみが着用していた色です（但し、普段着？）。

なので、一般人には禁色、、、。

色自体は、くすんだ黄緑色です。実は食用になります。

桃染（ももぞめ）の望

久し振りに有頂天になった。会社主催の大規模なパーティーで、何か案があったら出しなさいとの事。案って程じゃないけど、ずっとこの種のパーティーで気に懸かっていた事があったので会長に話してみたら、うん、うん、そうだねとニッコリされた。決定事項扱いとして回覧して良いと。自分の仕事が出来て嬉しい。仕事って、自分から見つけるものだと思う。だけど、何より嬉しいのは、これを口実に笹木サンに電話出来る事。彼は関心ないかもしれないけれど。

笹「やあ、お疲れ様です」

望「先日は、、、」

笹「こちらこそ（笑）」

望「私、会長秘書っぽい仕事、しました」

笹「へえ〜。手羅サンならやると思ってましたよ（笑）」

望「今度、その話を聞いて頂いてもいいですか？」

笹「すぐに聞きたいなあ」

望「えっ？えっと、、、今日も残業ですよ？」

笹「（声をひそめる）抜けちゃいますよ」

望「（何故か赤面）じゃあ、あの公園で？」

笹「あそこは会社から近いから、ちょっと、、、。渋谷駅で。申し訳ないけど」

望「駅のどの辺がいいでしょう。私のケイタイは」

笹「大丈夫です。むさくるしいけど、喫煙エリアで」

約束の時間を30分過ぎても笹木が来ないので不安になった。言われたスペースがよく見える場所に立っているけれど、時間潰しも兼ねて中をすり抜けてもみた。煙の臭いが髪や服に移りそうで嫌だった。彼の煙草は平気なのに。

このまま来なかったら、後どれ位で帰ろうか。フラれた時みたいに心が冷えて行く。朝まででも待ってしまいそうで、それも怖い。

笹「いや〜、さっきはビックリした（笑）。ま、可愛い女性にすぎりつかれて男冥利に尽きないでもないけど

（笑）」

望「ごめんなさい、、、」

笹「でも、良かったね。パーティー会場でスーツはね。コンパニオンのお姉さんもいいけど、新人もいいよね」

望「でも、どんなワンピースですか？って反抗的な子もいて（苦笑）」

笹「結婚式の二次会位オシャレしてくれって答えなよ（笑）。男受けする感じで、とか（笑）」

男「お楽しみの最中にすみません」

笹「はい、何か？」

男「テーブルを回ってマジックをさせて頂いているんですけど、邪魔ですか？」

笹「そんなサービスあったっけ？」

男「いえ、お店に頼んで、、、。ここだけの話、ボク、大学でマジック研究会にいますけど、この間のイベ

ントでハマして、これ、罰ゲームなんです、、、」

笹「ははは！シケた顔するなよ。丁度いいよ、この人ちょっと最近落ちてるから上げてやってよ（笑）」

マジックは、初歩的なものだった。どっちの手の中に玉があるか。何度やっても当たらない。外れて、それじゃあこっち？と残された手を示されて、はいと答えるとそっちにも無い。笹木が、一回位は当てなよとからかうので恥ずかしいけど、男の子がどんどん元気になって行って、自分もどんどん開放的になって行くのが分かった。彼が頭を下げて去ると、笹木はウェイターに、あの子に何か飲み物をやってくれと頼んだ。スマートな人、、、。

笹「さて、、、」

望「あ、あの、、、」

笹「？」

望「私、コーヒーが飲みたいんですけど、、、」

笹「ごめんね～、この店には無いや」

望「喫茶店に付き合って貰えませんか？」

笹「う～ん、、、。オレが知る限りでは、渋谷に美味しい珈琲を出す店は一軒だけで、そこはもう閉まっている」

望「コーヒーに拘りがあるほうですか？」

笹「そうとも言えないけど、紙コップ系の店では、たとえマグでも飲みたくないね」

望「私、コーヒー豆はローストして貰っていて、毎朝銅ポットで淹れてるんです」

笹「自分で品種を選んで焙煎して貰った豆って事？」

望「25種類位あるお店なんですけど、私が今気に入っているのはマサマキリマンジャロっていうんです」

笹「うわ！キリマンとどう違うんだろ、、、。飲んでみたいな」

望「いつでもお淹れします」

笹「どこに住んでるんだっけ？」

望「有楽町線の、和光市の手前の成増（なります）って所です」

笹「えっ！？オレ、川越だよ！だったら、突然だけど寄ってもいいかな？」

望「はい、、、（赤面）」

ずっと、笹木の腕を取って歩いた。ハイ！ってまた肘を出してくれたから。この前は、両手で掴

んで歩いたけれど、今夜は、自分の身体に引き寄せられてもたれるように歩いた。じわっと下腹が熱い。この人もそうだといい。そして、またじっくりと、あの見分けるってのをしたい。して欲しい。して、欲しい。欲しい、、、。

*桃は、邪気を祓う神秘的な力があるとされました。日本では、余り品が良くない官能的な色です。

聴色（ゆるしいろ）の望

麻「テラちゃん、今日、元気そうだねえ」

望「そう？別にいつもと変わらないと思うけど（笑）」

麻「ふ～ん。じゃあ、気のせいだね」

望「それより、あれ調べてみてくれた？」

麻「うん！ぜ～んぜんOKみたいだよ。むしろ、女の子達、何着て行こうか盛り上がってる（笑）」

望「ホント！？（笑）」

麻「私の諜報活動に寄ると、帽子はダメかなあとか積極的だよ（笑）」

望「帽子？（笑）」

麻「テラちゃんが、ナオちゃんの結婚式の時に被ってたみたいのじゃない？」

望「ああ、あれね。そんな可愛い格好が似合う時代もあったわね（笑）」

麻「内緒にしてくれる？」

望「何？（笑）」

麻「奈々子がさ、お見合いパーティー行ったんだって～。ぷくくくくっ（笑）」

望「あはははは！奈々子っぽくな～い！（笑）」

麻「ダメだよ！内緒だし、自分を塗り替えるとか何とか真剣だったよ？」

望「あはははは！もっと笑える！（笑）」

麻「・・・テラちゃん？やっぱ、今日、テンション高くない？」

望「え？んっと、、、。うん、そうかも、、、」

麻「まさか、、、笹木サンとまた会えたとかじゃないよね？？？名前出しちゃうけど、、、」

望「どうして分かったの～？（笑）」

麻「マジっすか！！！？」

テラちゃん、得意そうだなあ。さぞやイイ夜だったんだろうなあ。電車のシートで、オレの肩に頭乗せていいよって言われたら、まあ、悪い気はしないな、、、っていうか、もっとホレちゃうよね～。二度目があっただけでも、テラちゃんは流石だなあ。が、スケベな男だよなあ、、、。テラちゃんが赤くなる所をみると、「見分ける」ってヤツは相当スケベな事の気がする。恋人同士なら構わないとは思うけど、果たして恋人なのか？？？

麻「話の腰折って悪いけどさ、、、」

望「ん？（笑）」

麻「奥さんは？」

望「ちゃんと聞いたわよ、、、」

麻「水差してゴメンね。でも、大事な事だからさ」

望「それはオレの問題だから、望は心配しなくていいって言ってくれたわ」

麻「・・・気に入らない、、、」

望「何が？（怒）」

麻「オレの問題って事ある？二人の問題だよ！奥さんも含めて、3人の問題じゃないの？」

望「男らしいと思わないの？（怒）」

麻「男っぽいとは思うけど、男らしいとは思わない。言ってくれたって何？自分を卑下してるみたい」

望「嬉しくっちゃいけないの？（怒）」

麻「クチを出させて貰えないまま、実は奥さんともラブラブだったら嫌でしょ！？」

望「奥さんとは、ずっとしてないって言ってくれた！（怒）」

麻「男は、そういう事言うじゃん！」

望「好きな人が言う事を信じられなくて何を信じるわけ？（怒）」

麻「どっちかだけ本気だったら辛い事になるよ！」

望「私からタケシを奪って、今度は笹木サンを奪おうっていうの？（怒）」

麻「テラちゃん、、、。落ち着いてよ。あれは本当にごめん。だけど、それとこれは別の話だよ！？」

望「私だけイイ思いしてるってヤツカンでるんじゃないの？（怒）」

麻「・・・テラちゃん、もしもこの先、もしもだけど困った事があつたらいつでも相談乗るから、、、」

望「縁起でもない！（怒）」

テラちゃん、人が変わったみたい、、、。秘書室に移って、神山課長がいなくなった後から変だったけど、常識はある人だったのに、、、。笹木サンが嘘言ってるとは私にも言い切れないけど、信じられるなら、確認したって仲が壊れると思わない。テラちゃんが、私みたいに妊娠して捨てられたらどうしよう。注意しなっただけだったけど、言う暇なかった、、、。奈々子に相談しても、斬って捨てられる話だろうし、、、。友達としても、女としても、本当に心配してるって伝えるだけなのに難しいんだな、、、。フッチーとの事も、やっぱり恨んでいたんだなあ、、、。タケシって呼んだもんなあ、、、。そう言えば、望って呼ばれてるんだっけ。笹木サンの亭主面が、私は引っかかる、、、。でも、私が間違っていればいいな、、、。

*紅花で染めた淡い色。

濃い紅花染は、身分の高い人しか許されない色だった。

しかしながら、この程度まではよろしいという意味の「ゆるしいろ」が決められていた。

奈「望！昨日はお疲れ！張り切ってたじゃない（笑）」

望「会社の行事でストレス発散できちゃった感じ（笑）」

奈「女の子達も動き良かったわ」

望「そうだった？嬉しい！」

奈「ほら、あれよ。ホステスって職業には抵抗あるけど、女だったらちょっとマネごとしたいから（笑）」

望「そうなの？」

奈「そうよ（笑）。望だって、そうよ（笑）。だけど、望は、、、」

望「何？」

奈「なんか、雰囲気変わったわね。憂いを帯びたというか、、、」

望「や～だ！（笑）それより、お見合いパーティーってどんな感じなの？」

奈「！！！？麻美～～～。ま、いいけどね。う～ん、敗退した（笑）」

望「素敵な人、来てた？」

奈「カレカノがいない者達よ？（笑）大体、私より背が高い男が1人しかいないなんて（笑）」

望「う～ん、、、。お金かかるの？」

奈「あ、安いパーティーだったから質が良くなかったかも、、、。女子は千円でいいの（笑）」

望「たったの？？？ぽっきり？？？」

奈「その代わりに、飲み物さえ出なかったわ。もっとも、回転寿司みたいに移動するからね（笑）」

望「回転寿司？？？」

奈「3分で目の前の相手に自己紹介して、時間だと言われたら隣に男性がズレるの」

望「ぷっ（笑）。あ、ごめん。3分もどうかと、、、」

奈「大勢いるからね（笑）。で、フリータイムになって、好きな相手のトコに行っておしゃべり」

望「そっか、、、。3分あれば、タイプかどうか案外分かっちゃうわよね」

奈「ところがねえ、、、。私のトコには誰も来なかったの（笑）」

望「まさか！どうしてだろう、、、」

奈「う～ん。皆、カジュアルな格好だったけど、私、お嬢様みたいなワンピースだったから？（笑）」

望「どのワンピース？」

奈「望は知らないわ（笑）。衝動買いしたフリルたっぷりのヤツで服だけ歩いてる位似合っていない（笑）」

望「いつもっぽいシンプルな服で行けば良かったのに、、、」

奈「たまにはいいかなって買った位だから、人から指摘されるまで気付かなかった（笑）」

望「誰かに何か言われたの？？？」

奈「その話はもういいの（笑）。が、やっとしゃべった男の人を怒らせたわ（笑）」

望「ダメじゃない!？」

奈「男の人って、どうして自分より頭が悪い女性を好きなんでしょうねと言っただけよ」

望「真実よね? どうして怒ったんだろう、、、」

奈「貴女は自分を頭がいいと思ってるわけ? って（笑）」

望「実際、頭いいわ」

奈「ホントの事を言われて、その人カッと来たんでしょ（笑）。ホントなら言っただけいいとは限らないわね」

望「だわね～。が、そんな男共に奈々子は勿体ないから忘れていいわ！」

奈「全然平気よ。着付け教室に通う事にしたし」

望「何の話? 展開について行けない、、、」

奈「報告するわ（笑）」

人より変わってはいるけど保守的だからとは、もっと保守的な望には言えないわ。ボクシングも、飽きたんじゃないかってうちに籠っていたいから止めた気がするのよね～。それにしたって、家にある着物一式を持ってくればいって言われても、振袖はマズいわよね。よく分からないけど、なんかこう縞柄な感じの粋な着物が欲しいわ。習い事すると一週間がアッという間よね。男は、その後でいいわ。集中、集中！

*和装の色として、藤色は年配向き。赤みのある紅藤（ライラック色）が若向き。若藤とも呼ばれる。

狐色（きつねいろ）の麻美

麻「遊んだ、遊んだ〜〜〜」

藤「気が晴れた？（笑）」

麻「ゴメンね、いい歳して遊園地に連れてってなんて」

藤「気にするなよ、水臭い（笑）。が、、、麻美は妙な声を挙げるからちょっと、、、（笑）」

麻「えっ！？えっ！？妙って何！？」

藤「やっぱり無意識ね（笑）」

麻「やだあ〜！まさか、エロエロな声とか？？？（汗）」

藤「ぶっ（笑）。違う、違う（笑）。来いやあ〜！（怒）とか、にやろお〜！（怒）とか？（笑）」

麻「言っていないよ！」

藤「いや、それが言ってるから面白いんじゃない？（笑）」

麻「言っていないって！」

藤「じゃあ、言っていないって事にしようよ（笑）」

麻「あ、大人ぶった、、、」

藤「しょうがないよ、あの時と同じだよ（笑）」

麻「あの時？？？」

藤「あ、失言（笑）。忘れて？（笑）」

麻「あ、ズルい〜！ん〜と、、、アノ時？？？」

藤「う〜ん、、、多分、正解（笑）」

麻「フッチー、、、」

藤「ん？」

麻「私、アノ日、こっばずかしい事何か言ってた？？？」

藤「色々よね（笑）」

麻「気になる、、、」

藤「あの日の事は話題にしない方が良くない？」

麻「今でも、テラちゃんの事好き？」

藤「そりゃあね、、、。だけど、実際に付き合っていると清廉潔白な女のせいかしんどい（笑）」

麻「一見、Hな話が出来ない感じだよ（苦笑）」

藤「そういう事じゃないよ（笑）。なんか、正しい彼氏ってのを演じる事を余儀なくされるというか、、、」

麻「テラちゃんだって、結構生臭い女だよ？」

藤「生臭い？？？」

麻「悪口としてじゃなくて、ちょっとやっぱり聞いて貰おうかなあ、、、」

藤「何かあったとは思っていたけど、友情の危機か何か？（笑）飯食いながら聞くよ」

テナントの割には頑張ってるお店だなあ。お皿を洗う音は、まあしょうがないよね、、、。あれって、ホンモノの帯だよね???アンティークの、、、。可愛い結び方だなあ。和風のディスプレイも悪くないなあ。お箸も可愛いし、手、抜いてないなあ。フッチーが、わざわざ場所を移動するだけの事あるわ〜。

藤「で、オレはその話を聞いてどうすればいいわけ？」

麻「ズバリ、テラちゃんが騙されてないか知りたい」

藤「悲しいけど、騙されてるね。85%位ね」

麻「?15%は上手く行くって事？」

藤「残念だけど、、、この世に絶対って無いから、15%引いてみただけ、、、」

麻「でも、笹木サンがテラちゃんを好きなのは間違いないでしょ？」

藤「そりゃそうだよ。だから、ラッキー!って思って止めないでいるんじゃない？」

麻「万にひとつも、奥さんとは別れないの？」

藤「その気は無いだろうね」

麻「テラちゃんに勝算は無いわけ?(怒)」

藤「オレに噛み付くなよ(笑)。望って駆け引き出来ないからね」

麻「どう、かけたりひいたりすればいいの？」

藤「(笑)。恐らく、もう手遅れだよ。相手のペースだし、望には何の切り札も無い」

麻「切り札が降って湧くかもよ？」

藤「人の恋愛にはクチ出すものじゃないよ。それより、今度はオレに付き合ってよ」

麻「あ!それでこんな所まで来たのか！」

藤「まあね。遊園地に比べたら、これの何がどういいの?って場所だけだよ(笑)」

確かに、なんだコレって所だ。歩道橋を登った真ん中。どっかに行くのかと思ったけど、フッチーは歩道橋に寄りかかっている。幅の広い道路。で、走っている車が全く無い。形だけ未来都市みたい。左手のオフィスビルは、まだテナント募集中らしい。真っ暗。右手のホテルも人の出入りが全然無い。立派な歩道橋のステップ両側には灯りが燈っている。誰の為にこんだけお金かけて作ったんだろう。不思議な景色。まだ完成してない道路なのかな。駅のあっち側は賑やかそうだった。振り返ると明るいビルが見える。が、こっち向くと別世界、、、。フッチー、黙っているとギリシャ彫刻みたいに端正な顔なんだよね。いつ、ここを見つけたんだろう。テラちゃんにフラれた時かなあ。私、いつもしゃべってるけど、沈黙ってのも心地いいな。そうか、私、相手に気を遣って無駄にしゃべってるかも。黙って二人でいると気が休まるなあ。

藤「ごめんね。退屈だった？」

麻「ううん。ここ、好き」

藤「電車の中で、オレの肩に頭乗せていいぜ(笑)」

麻「ばかじゃん！（笑）」

うわ～、やべえ～、麻美がココ好きって言った時、もやっと来た～。オレ、おかしいよな。誰とも行った事ない特別の場所だけど、麻美なら良さが分かる気がしたんだよね。当たりだったな。何も言わなかったけど微笑んでいたから。遊園地は久しぶりで楽しかったけど、あの短い時間はもっと満たされていた。それに、独りで行くとは帰りたくなるけど、麻美がいてくれたから自然に戻れたって感じ。オレ自身はつまらない男だけど、麻美がいると小さい事件になら事欠かない。事件の無い人生なんて、それこそつまらない。望も、どうせ人の言う事に耳貸さないし、ささやかな事件の渦中でジタバタするのも悪くないだろう。浮気だ不倫だなんて、ありきたりで、ダラダラやってる価値があるとは思えないけどね。

*ヨーロッパに比べて動物の色名が少ない日本でも、狐は身近な動物だったらしい。

狐色は、食べ物などで、程よい加減にこんがり焼けた時の形容に使われる。

甚三紅（じんざもみ）の望

笹「ただいま！」

望「お帰りなさい」

笹「どしたの！？その頭！？」

望「えっ！？だって、この前、もっとスッキリさせたら？って、、、」

笹「オレは、そんな事言ってないよ。髪が伸びて中途半端だと言ったのは自分でしょ！？」

望「おかしい？（涙）」

笹「なんというか、、、いや、おかしくないよ、別に。それよりいいニオイ！」

望「・・・突然だったから、何もなくて大根ばかりよ（涙）」

笹「見ていい？エッ？大根とタコの煮物？？？ふ～ん、、、けど、旨そう！」

望「ねえ、、、切り直した方がいい？（涙）」

笹「やめてくれよ、オレ、疲れてるって知ってるでしょ？（溜息）」

望「ごめんなさい、、、」

笹「それ、そのすぐ謝る癖も、この際だからやめて（溜息）」

望「ごめんなさ、、、じゃなくて、分かった、、、」

笹「分かればいいよ（笑）。さて、胃袋の欲望は後に回そうかな（笑）。ん～、ストリップしてよ」

望「！？ムリよ！」

笹「ゆっくり脱ぐだけでいいからさ（笑）。そしたら、望にも倍のいい思いさせてやれるよ？（笑）」

望「断れないって分かって言ってるのよね。ひどい人、、、」

笹「まんざらでもないって、顔に書いてあるぜ？（笑）」

まごまごしていたら、笹木の手が伸びて来た。ダンスのリードをするようだ。腕が届く中で、遠くへ近くへ。上へ下へ。前へ後ろへ。ちゃんと立って！（怒）、、、そんな事言われても、、、。この人に流させられる涙は、幾通りあるんだろう、、、。

笹「何？もう一回？（笑）オレ、腹減ったよ（笑）。飯にしよ！？」

望「（赤面）すぐ、温めるわね」

笹「これは何？」

望「大根とホタテの貝柱のマヨネーズ和え」

笹「これ、旨いね！漬物？」

望「ナスとキュウリとミョウガを細かく切って塩水に晒してから、酢醤油で味をつけたの」

笹「焼き豚も旨いねえ～。ちくしょう、望の手料理毎日食いてえ～（笑）」

望「もうちょっと早く、来るって電話1本してくれれば、、、」

笹「我が儘言わないで（怒）」

望「・・・はい、、、」

笹「あとさあ（笑）、そのベビードール、ムリがない？（笑）」

望「（赤面）自分でも、年甲斐もなくて思ったけど、、、」

笹「下着とかも頑張らなくていいよ？（笑）男って意外に見てないからさ（笑）」

望「そうなの!？」

笹「どう脱がそうかって頭一杯でね（笑）。見るのが好きなヤツはオジサン（笑）」

望「そうなのね、、、（何故か落胆）」

笹「う〜ん。でも、ちょい玄人な下着は燃えるかも（笑）」

望「真っ赤なのとか??？」

笹「望って、何年女やってるの？（笑）ハミダシテいるヤツだよ（笑）」

望「はみ出してる??？」

笹「（笑）いいよ。望には期待してないから（笑）。吸い付く肌だけで最高！（笑）」

誉められたのかな？彼が帰った後の身体って、一層熱い。もってって言えば良かったのかな？なんだか、どんどん弱い女になって行く気がする、、、。待つだけの女だし、、、。幸せだけど、心細い、、、。

*かすかに黄味を含んだ中程度の濃さの紅赤色。

紅花染めが高価な為、茜か蘇芳を用いた代用紅染め。

庶民に愛用された、まがい紅。

真朱（しんしゅ）の奈々子

和「丘さん、今日、お仕事お休みですか〜？（笑）」

奈「懲りない質問ねえ（笑）」

和「マニュアルなんだからしょうがないじゃん（笑）」

奈「ナンセンスよね。工作中だったらここにいるわけじゃない？」

和「オレが社長になったら改善するよ（笑）」

奈「まずは、スタイリストにならなきゃじゃん（笑）」

和「大丈夫。またいいモデル確保した」

奈「またナンパ？」

和「仕事だと割り切ってるから声かけるのなんて平気」

奈「恋愛でもその積極性が出せばねえ、、、」

和「丘様の髪って、いつも手入れがいいですねえ〜。でも、うちのスキャルプケア続けて下さいね〜」

奈「あ、逃げた、、、」

和「着付け教室はどうだったの？」

奈「うふふ。新しい世界よ（笑）」

和「分からない事は、オレに聞いてね！」

和正くんは、本当にシャンプーが上手だ。コンテストも、画像で見る限りイイ線行ってる。大体、このサロンの花は立派だけど、和正くんが活かしていると知った時は尊敬した。スカビオサダのシンビジウムだの少し南国テイストな花材を上手く使う。葉物や枝物の使い方も大胆。オレンジと紫も一緒に使いこなす。生まれつきのセンスなんだろうな。医者や美容師のような人の身体に触る職業の人間は、勘が鋭くなるとも聞いた事がある。医者はどうか怪しいけど、美容師はそうかもって思う。

奈「あ、そうだ！HPの自己PRで、一人だけ最近観たアーティスト作品を勧めてる子がいた」

和「誰？オレはダメだった？」

奈「ダメじゃないけど、写真写り悪かった（笑）。その男の子は、美形だった。お日様的な名前の子」

和「分かった！ヒカワでしょ！？太陽の陽にサンズイのカワ。下の名前は暁」

奈「そうそう！ヒカワアカツキ君！名前までイケメンだわ（笑）」

和「ふん！それね、サトルって読むんだよ！今日、うちにヘルプで来てたよ」

奈「どの子！？」

和「正面の鏡の裏（笑）。おい、ヒ〜カワ！」

ひょいっと顔だけ突き出した男の子は、恐ろしい程の美形だった。背も相当高い。そして、どち

らかという色白で痩せている。髪型はよく分からない。枯れ草色のニット帽を被っていたから。染めてはいないようだった。トップスは、余り見ない感じのイエロー。古着かも。バックプリントがありそう。見たい、、、。首を傾げて、ペコリと会釈するとすぐに引込んだ。残念。

西「丘さん、今日、前髪切ってみませんか？」

奈「切るって??？」

西「眉上に」

奈「ええっ～!？」

西「眉の形いいし、似合うと思う。後ろは切りたくないでしょ？」

奈「西方サンがそう言うなら、、、。が、ブスにしたら承知しないですよ!?(笑)」

流石は美容師だなあ。ちゃんと似合うスタイル作るなあ。気に入ったわ。

和「似合ってる、、、」

奈「アンタが照れてどうする(笑)」

陽「あの作家の絵ですけど、、、」

奈「?!(いつの間に!!!)」

陽「多分、今月一杯は世田谷美術館で観られます」

奈「あ、ありがと、、、」

陽「いえ」

ドキッとした!スゴいタイミング(カウンターで会計して背を向けた途端)で現れたし。

和「お疲れ～」

奈「お疲れは自分じゃん(笑)」

和「陽河の事、気に入ったでしょう?(笑)」

奈「ドキッ!(笑)」

和「鼻が高くていいよなあ～」

奈「でも、愛想は良くなかったよ?と、一応否定してみる(笑)」

和「緊張してたんじゃない?オレが、どうして奈々子サンがヤツに関心持ったか話したんだよ」

奈「いい仕事するねえ(笑)」

和「オレもアイツを気に入っているから、奈々子サンとも仲良くなって欲しいなと思ってさ」

奈「あんな美しい男は初めて見たわ(笑)」

和「アイツも鷺沼に住んでるんだよ」

奈「へえ～、じゃあ、今度ご飯に呼んであげようよ」

和「ヤッタ!」

奈「・・・でも、彼はそっち側の人じゃないんでしょ?」

和「欲を出す気はないよ（笑）」

私は、和正クンの情念の深さに気付いていなかった。陽河クンの男心には、もっと気づきようもなかった。一回りも歳が違う男の子達と、暫く何かと楽しんだ。でも、ツケは、必ずやって来る。三角関係は、どこにでも転がっている、、、。

*真朱の「真」は、人造の銀朱に対して自然のままの朱であるという意味。

自然界の自然の罪は問えないが、人間の場合、自然が罪になる事もある（b y 苑田）。

緑（みどり・青い）の望

笹「ただいま〜！」

望「お帰りなさい！」

笹「今日も、そこはかたなくいいニオイ〜」

望「今日だって、大した事ないわ、、、。でも、これ、どう？」

笹「・・・灰皿？」

望「間に合わせのお皿じゃと思って買ったの」

笹「高そう、、、」

望「そんな事もないわ。北欧雑貨のお店で見つけたのよ」

笹「ふ〜ん、、、。必要ないよ。前のを出してくれる？」

望「でも、、、」

笹「これは、誰かにでもあげなよ」

望「気に入らなかった？」

笹「そういうわけじゃないけど、必要ないと言っただけだよ」

落胆した。何日もかけて探したのに。自分が煙草を吸わないので、結構大変だった。クリスタルもアルミも嫌だった。素っ気ないのも、ポップ過ぎるのも。これは陶器製で、オリエンタルとは違った民族調の手描きのイラストが描いてあった。野生の動物のシルエット。蔓模様も素敵だと思ったのに。あったかい白地に、ラピスラズリみたいなブルーが効いている。オレンジがかった赤と青がかったグリーン等の色使いも新鮮だと感じた。だけど、使う本人が使う気にならないなら、失敗だったんだろう。元々、自分にはセンスがあると言えないし。一生懸命選んだんだけど、、、。

笹「おっ！コレ、旨い！クラッカーに合う！」

望「キャンベルのスープ缶ごと、カニとネギとセロリのみじん切りを入れてゼラチンで固めたの」

笹「それだけ??？」

望「クリームチーズとマヨネーズも入ってるわ（笑）。そんなに美味しい？（笑）」

笹「どんだけでも食べそう！酒が欲しい〜！」

望「ルーマニアワインの赤ならあるけど」

笹「それって旨いの？」

望「とびっきりに美味しい上に無農薬よ（笑）」

笹「酒やタバコが好きで長生きする予定なんかないさ（笑）。けど、出してよ（笑）」

望「ちょっと待ってね」

笹「あ、オレが開けてやるよ」

望「ううん、ありがとう。大丈夫。固定してハンドルを回すと下まで行ってコルクと一緒に戻る

から」

笹「へえ～。そんなワインオープナーがあるとはねえ～。なんか、望って生活水準高いね（笑）」

望「そんな事はないと思うわ（笑）」

笹「自分じゃ分からないんだよ（苦笑）」

望「どうかな（笑）。あのね、話変わるけど、今日、神山課長サンに会ったのよ？（笑）」

笹「どこで??？」

望「外出先が近かったから、総務に来た振りして部屋まで堂々入って行ったの（笑）」

笹「・・・」

望「デスクが窓際だったら文句言ってやろうと思っていたけど、大丈夫だったわ（笑）」

笹「・・・」

望「とっても驚かれたけど、喜んで貰えたわ（笑）」

笹「君、、、怖い女だね、、、」

望「えっ???(笑)」

笹「ヒイた、、、」

望「えっ???(泣)」

笹「今日は帰る」

望「えっ!?(泣)」

止める間もなかった。戸外は、風が強くなっていた。一人分の冷たい風が入って来た。

*確か、グリーンホルンは、未熟系バカという意味です（笑）。

ネイティブに使ったら、大ウケでした。

死語だったのかも（笑）。

緋色（ひいろ）の望

奈「それで明るくなったように見えたり、沈んで見えたりしてたのね。話こそ見えたわ」

望「そんなに分かり易かった？」

奈「まあね。で？」

望「2週間も連絡ないなんて、どうしたらいいかと思って、、、」

奈「望に選択権があるとでも？」

望「エッ？」

奈「あっさり終わりが来たって事じゃないの？」

望「諦めがつかないわ、、、」

奈「そもそも、あっちはこっちのアドレスを知っていて、こっちは知らない、、、。バカ？（怒）」

望「奥さんを警戒しての事じゃないかと、、、」

奈「だとしても、望、信用されてないって事よ」

望「でも、どうして急に、、、」

奈「神山課長の所に行ったからでしょ！（怒）」

望「いけない？（怒）」

奈「業務中！迷惑なだけ！」

望「喜んで下さったわ！」

奈「周りの目も考えた？（怒）」

望「知ってる人ばかりよ？」

奈「一生言ってなさい、、、」

望「ヤキモチって事はない？（泣）」

奈「怒りを乗り越えて、むしろ面白い（笑）」

望「電話は彼からって言われているけど、何かあったのかもしれないし、、、」

奈「もしも、だけど、彼が死んでも望には連絡は来ない立場なのよ？」

望「嫌よ！」

奈「だからさ～、そういう我が儘が通らない、日が差さない立場なの！」

望「宙ぶらりんで辛いわ、、、」

奈「どうして電話をくれないんだろうって考えてるでしょ？」

望「24時間その事ばかりよ」

奈「どうしてって考えるのは無駄なのよ。事象で捉えるの」

望「じしょう？」

奈「享樂を共にした二人の片方が冷めたって」

望「享樂！？（怒）」

奈「広い意味だよ。快樂とは言ってないわ」

望「冷めたかどうか聞いてみてもいいわ！（怒）合鍵もまだ返して来ないし！」

奈「清算するまでもない短い間だったじゃないの」

望「時間じゃないと思うわ！」

奈「電話したりするのはよしなさいよ？」

望「会社の外で時々待っているんだけど会えないの（泣）」

奈「！？確かに怖い女ね。でも、何言ってもダメでしょうね、、、。麻美には話した？」

望「いいえ、、、」

奈「彼との仲が壊れたのは、麻美のせいじゃないわ。そこだけは私も譲らないわよ？」

望「麻美の、自分はお見通しだって態度、、、」

奈「何でもかんでも感情論で押さないの！」

奈々子だったら、いい案があるかと期待して、思い切って打ち明けたのに、、、。恋する女ってイメージないし、抜擢ミスだったわ。この人だ！って人と巡り会えて、幸せなような怖いような気持ちで、でも、女に生まれて良かったって満たされて、、、。それが今は断崖絶壁で足がすくんでいるみたいに身動き取れない。いっそ何も考えないで海に身を投げてしまえばいいのかもしれないけれど、どうする事がそれなのかも分からない、、、。眠れない、、、。

*緋色は、確か娼婦の赤です。

1 ページ目でもその色が出ているのですが、着る人物次第なのか？

だったら、どの色も気合いで自分色に！

長春色（ちょうしゅんいろ）の奈々子

和「ぎゃはははは！奈々子サン、鼻ヒクヒクは反則～！」

奈「ばはははは！和正くんが先じゃん！エレベーターは密室だからよしてよね（笑）」

和「だってさ～、あの人達、ちゃんと美容院行ってると思うけど、あのスタイルはなし！（笑）」

奈「おばさんなんて、あんなものでしょ？（笑）」

和「ブスな人程、ちょっと直すだけで可愛くなるのに残念だと思わない？」

奈「可愛くしても評価が低かったらと思うとコワイんじゃないの？（笑）」

和「ふん！ま、いいよ。いつものキャラメル味のコーヒーでいい？」

奈「あ、うん、お願い～」

このカフェ自体は、ありきたりで嫌いだけど、田舎な二子玉川では、ここが一番オシャレだと認める。青味がかかった白い建物で、ここは6Fだか7Fだかでなんと吹き抜けになっている。身を乗り出して下を覗き見る。頭の中が空になって気持ちいい。

和「お待たせ～」

奈「幾らだっけ？」

和「いい加減に覚えれば？はい、レシート」

奈「すまねえ（笑）」

和「ねえ、ねえ、今日ね」

奈「始まった（笑）」

和「あ！そういう事言うなら、驚いたら100円ね？（笑）」

奈「どうぞ、どうぞ（笑）」

和「ふん！バカにして！」

奈「で？」

和「今日、陽河を呼んであるよ」

奈「えっ！？」

和「はい、100円ね（笑）」

奈「ここに来るの！？」

和「そろそろマックの前で待ってる頃」

奈「何故にマック！？」

和「二子玉（にこたま）は全く知らないって言うからさ」

奈「彼も休みなの！？」

和「オレと同じ日にさせてあったの」

奈「でも、彼は、、、」

和「そうだけどさ、いいじゃん。オレ達のお気に入りだしさ。アイツ、寝起きの声メッチャ可愛

いの（笑）」

奈「いやらしい、、、」

大きな信号を渡ればマック（マクドナルド。英語の発音は、マ、ダ！ナルドな感じ）だった。来てる！ゆったりめの服を着て、でっかいヘッドフォンで音楽を聴いている模様。顔ちいせえ〜。今日の自分のパンツと同じ、モノトーンチェックのストールを巻いている。妙に恥ずかしい。

奈「和正くん！急ごう！マック前には勿体無い男だ！しかし、相当背が高いなあ」

和「ね？ね？改めて、いい男でしょ？呼んで良かったでしょ？（笑）」

奈「お疲れ〜。まだ時間前だよ？」

陽「待つのは平気だけど、待たせるのは嫌いなんです」

奈「じゃあ、レストランに移動しよっか！」

和正くんが見つけておいた店は、ちんまりした入り口のイタリアンで、黒板にお勧めメニューが書いてあった。ピザは店の窯で焼いているという。

奈「陽河くん、嫌いな物は？」

陽「一切ありません」

奈「私達と一緒にだ！気が合うじゃん（笑）」

陽「色々と好き嫌いが激しいんで、食べ物みたいな細かい事では言いません」

奈「貴重なお休みに、ゴメンね」

陽「暇ですから」

もしや、こんなイイ男に彼女がないのか??? Why ???

和「ちょっと、ごめん」

奈「（うわ〜、顔に出るヤツだねえ〜。今気になってるって相手からだな）」

和「ごめ〜ん！あの人、急に時間できたんだって！新宿に行かなきゃ！」

奈「おお、そうか！ガンバレ！」

わ！わわわ！陽河くんと二人っきり取り残された！そっと彼を見たけど、、、動じてない！？確か、21歳だって言った。ギリギリ犯罪ではなし！っと、、、。が、私は完全にオバサンだよね？ヤバイ、、、。食べ物の味がしなくなって来た、、、。

陽「何？」

奈「あ、いや、それ美味しい？」

陽「美味しいですよ。取ってあげましょうか？」

奈「あっと、、、う、、、じゃあ、そのイクラが乗ったヤツを、、、」
陽「どうぞ」

初めて、笑顔を見た。それは、頬を緩ませる程度の、彼にぴったりの笑みだった。

*中国原産の四季咲きのバラ「長春花」をさす。

萌木（もえぎ）の麻美

男「Hi！ボク、マイキー！ヨロシクね！」

麻「マ、イキー？（いきなりの握手？？？）」

男「ホントは、マイクだよ、そっちが良ければ（笑）」

麻「えっと、、、ハーフか何かの人？」

男「よく聞かれるけど、失礼な質問だよ？（笑）」

麻「ごめん、、、。けど、だったら名乗らなきゃいいじゃない？」

男「そっか（笑）。そこは、まだアメリカ流が消えないな（笑）。消す気ない部分だし」

麻「やっぱ、アメリカとかじゃん！」

男「キレないでよ（笑）。ハーフだとかどうでもよくない？あっちじゃ、ハーフなんて差別用語ないし」

麻「差別用語だったの！？」

男「無知とは、己が何を知らないかを知らぬ事（笑）。で、そっちは？」

麻「どっち？」

男「名前（笑）」

麻「広野です」

男「コウノ何？」

麻「麻美ですけど？」

男「麻美ちゃん、幾つ？」

麻「え？ん、と、22」

男「ふっ（笑）。32歳か」

麻「自分だって失礼！間違ってるし！アメリカじゃ、女性に歳聞いていいって知らなかった！」

男「絶対に聞かないよ。日本に来たら、皆が聞くからそうするものかと思って、、、」

麻「言われてみればね、、、。で、歳一緒だと意味なく盛り上がるとか、あるなあ〜」

男「おっと！品川ナンバー！L u c k y！」

麻「なんでラッキーなの？」

男「練馬ナンバーよりテンション上がらない？（笑）」

麻「自分も差別の人だよ！？」

男「好みに関する事では許される」

麻「理屈っぽい、、、」

男「千葉ナンバーと横浜ナンバーと、どっちの助手席に座ってドライブしたい？」

麻「・・・よこはま、、、」

男「ふふっ（笑）。ボク、正しいでしょ？」

嫌だなあ〜、このマイキーとかいうヤツ。グリーンジャケットにオレンジ色のパンツってどうよ？？？ギンギンの金髪にしてるから、ギリギリセーフ？目が慣れて来たのかなあ。でも、ア

クセサリーは一切してない、、、。どうしてピアスしてないんだろう、、、。帰国子女だよね???謎なヤツ、、、。

藤「お疲れ～。もう寝てた？」

麻「マジお疲れだよ～！」

藤「初仕事どうだった？交通量調査だったっけ」

麻「大変だったよ～。ナンバーも見るの！鼻の穴は真っ黒になるし」

藤「ははは。やってみないと分からない事って多いよね（笑）」

麻「マイキーもそんな事言ってた、、、」

藤「誰??？」

麻「一緒に組んだ帰国子女の男」

藤「へえ～、それは飽きなかったろうね」

麻「う～ん。会社では結構同じタイプの人種しかいなかったとは思う」

藤「彼から何か学んだとしたら、会社辞めて良かったね」

麻「会社もそうだし、いつも日本人に囲まれているから偏った常識に支配されてるかも」

藤「麻美！それってすごい成長かも！」

麻「頭では分かってたと思うけど、感覚的にね」

藤「次のバイトもガンバレよ！」

麻「トイレがアンモニア臭くない事を願うよ（苦笑）」

フッチーったら、マイキーの事、戦士だなんて、、、。男って単純だよなあ～。でも、ああやってマイキーが私達の意識改革してると考えると、逆に色々と納得行くんだよね～。効率は良くないけど、感化された人っている気がする。マイキー、謝ってたな。英語が話せない人がいると知らないから英語で話かけているだけだって。世界規模の視点に立つと、英語ってもはや一般人にも公用語なのか、、、。名前を名乗るワケも、文化の違いと言っちゃそうだけど、深いんだなあ～。ねむねむ～、、、。

*萌黄とも書くが、木の葉の萌え出る色という事で、このようにも書く。

歌舞伎の定式幕の緑色。

どうしよう、、、。まだ結構時間が早い。相手が彼じゃなきゃ、もう一軒誘うけど、、、。かと言って、このまま別れたら、二度とご飯できないかもしれないし、、、。誘うなら今って時に、あっちから誘って来ない時点で誘うのは無謀か??? イイ男を誘うって勇気要るなあ、、、。私を執着させる程の男は滅多にいない。やっぱり誘うだけ誘ってみよう。これを乗り切ってこそ女だ!

奈「まだ早いから、どっか場所変える？」

陽「いいですよ」

うお〜! あっさりOK! 並んで歩くと益々スタイルいいなあ、、、。よし! ガードも甘い!

奈「イイ男と歩く時は、腕を組まないで失礼なのよ？」

笑われた? 気にしないわ! 私と身長が釣り合う男なんて余りいないんだし。嫌がられたワケじゃないし。あ〜、いい気分だわ。デザイン性の高いジャケット着てるわね。踵が潰れた革靴? 流行っているのかな? 何を着ても似合いそうだけど。

奈「ねえ、、、なんか何もなさそうなトコに向かっている気がするんだけど、、、」

陽「しかも、道が暗いですね」

奈「陽河くんが自信もって歩いている気がしたから、、、」

陽「目的はもって歩いてないですね」

奈「そうなの!? じゃあ、とりあえず戻ろうよ!」

陽「ええ、道は覚えています」

奈「スゴい!」

陽「特に、、、。普通ですよ」

運が強かった。素敵な店だったから。客がいない。最高。木製のドアが、ダッチスタイルっていうのかな、上と下で切れていて、上半分開けるとオシャレ。彼といると天が味方してくれるのかも。

奈「いつもそれ位長い髪なの? (安全に髪型の話から、、、)」

陽「決めてません。そろそろ切ります」

奈「似合っているのに惜しいわ」

陽「??? 色々なスタイルを試したいんですが、、、」

奈「女だったら誰だって、その髪の中に手を入れたいって思うわ」

陽「・・・」

奈「あ、ごめん！しかも、オバサンの発言だったかも、、、」

陽「自分がオバサンだと思っていたんですか？」

奈「えっと、、、。陽河クンとこうしているのは気が引ける程度には自覚してる」

陽「少なくとも、オレは若い女には興味ないです」

奈「そうなの!？」

陽「年上としか付き合った事がないですね」

奈「(マジかい!?)で、今もなの？」

陽「彼女いない歴4年ですが？」

奈「!?(ええと、17歳の時から女なし!?)意外、、、」

陽「もう、いちいち振るのが面倒で、、、」

奈「陽河クンに振られる女の子達、全員泣くでしょうね」

陽「ええ。でも、泣く女は嫌いなので、、、」

奈「?泣いてる女の子、どうするの？」

陽「置いて帰ります」

奈「残酷、、、」

陽「そこで別れなかったら、別れようって決めた事はどうなるんです？」

奈「やり直すとか？」

陽「オレは、一度決めた事は変えませんが」

流石は九州男児ね。でも、賢い人よね。男を立てる九州女性が偉いんですって言った。学校の成績と頭の良し悪しは別だとも言った。大人っぽい子だなあ。別れがたい、、、。

奈「そっちのホームまで見送る」

陽「じゃ、オレが見送ります」

二子玉ってつまらないトコだと思ってたけど、今日は楽しかった。

陽「残念ですけど、あの電車が着いたら多分人が沢山降りて来て座れなくなっちゃうから、今乗った方がいい

ですよ」

奈「分かった。おやすみ」

あれ?まだドアの所に立ってる、、、。立ってるだけで絵になる男、陽河暁、、、。電車、動かないな、、、。別にこっちを見ているワケでもないのに恥ずかしくなって来た。ダメだ、我慢できない!

奈「お願い、もういいから帰って！なんかしらんけど、ここにいられるとメッチャ恥ずかしい」
陽「そう言うなら、、、。おやすみなさい」

なんだろう、この胸のドキドキ。帰ってと言いながら胸を軽く押した感触が甘ったるく纏い付く。10歳以上年下の男にホレた???そんなバカな、、、。でも、今もあっちのホームに彼がいると思っただけで探したくなる。うん、完全にバカになっちゃったんだわ。人生初のバカじゃないだろか、、、。バカやるってワクワクするかも、、、。やっとなんか明日が見えて来たわ！

*明け方の空の色のような浅い黄味の赤色。

曙色。

クリスマスカラーの3人

麻美、、、電源切ったままだ、、、。今は、麻美しか思い浮かばないのに。こんな日だもの、つかまらないかもしれない。でも、彼はもっとつかまらない、、、。

藤「よお！売れてる？」

麻「フッチー！どうしたの！？」

藤「様子を見に来てあげた（笑）。ここ、分かりにくい場所だね」

麻「新大久保って時点で期待してないよ（笑）」

藤「寒くない？」

麻「大丈夫だけど、このエプロンがダサイ、、、」

藤「似合っていないから大丈夫（笑）。ひとつ貢献するよ」

麻「うへえ～、今夜またこのケーキ見るのか（笑）」

奈「お疲れ～！差し入れ～！」

和「わあ～、いつもありがとう！今日は何？」

奈「ドイツのクリスマスケーキのシュトーレン」

和「潰れたパンみたい、、、」

奈「これだから田舎者は困るわねえ。ひとつは陽河クンにあげてね」

和「今日は遅くなるから渡せないかもしれないよ？」

奈「日持ちするから大丈夫。彼にヨロシク」

クリスマスには、これとアイスワイン（高級デザートワイン）。で、その時々 of イイ男から電話を貰う。去年は、芸大卒の建築士だった。イヴも仕事だから彼女には来るなと言っておいて、私には電話をくれた。彼女が知ったら怒るだろう。電話くらいって問題じゃないだろうから。長電話になったし。1時間45分くらいだったかな。記録更新にはなっていないけど。今年は誰にも頼まなかった。陽河クンは、まだ仕事だろうなあと思いを馳せながらの一人のイヴも悪くない。というか、なんか、そうやって過ごしてみたい。どうしてちっとも淋しくないんだろう、、、。不思議&素敵。ホワイトクリスマス！

藤「すごい荷物だけど泊めないよ？（笑）」

麻「ふん、だ！そんな気ないよ～。まあ、これ被って」

藤「ヒゲ付き三角帽！？嫌だよ！」

麻「盛り下がる男だね！」

藤「それより、麻美、料理できるの？」

麻「既にジャガ芋を茹でてるでしょ？」

藤「言われたから飯炊いておいたけど、クリスマスに米？」

麻「葡萄のママさんにフォアグラ分けて貰った」

藤「おお！流石は常連！オレは、ロゼのスパークリングワイン用意した。で？」

麻「バルサミコソースを使って、フォアグラ丼を作る」

藤「は？？？」

麻「パセリとタマネギだけでポテトサラダも作る」

藤「独創的だね、、、」

麻「フッチー、一緒に過ごしてくれてありがとね」

藤「オレこそ、平日になるところだった（笑）」

麻「ジングルベ〜ル、ジングルベ〜ル、ふんふんふんふんふ〜ん」

日付けが変わる、、、。一人つきりには耐えられない、、、。

麻「テラちゃん？ゴメンね！電源切ってた。えっと、トモダチ白けさせたら悪いと思って」

望「麻美、、、私、どうしたらいいか分からなくて、、、」

麻「何かあったんだね？」

望「確かじゃないけど、、、」

麻「どした？？？」

望「どういうワケか、陽性反応が出たの」

麻「妊娠！？」

望「そんな筈ないと思うんだけど、、、」

麻「すぐ行くから！」

望「こんな時間じゃ、、、」

麻「一人でいるのは良くないよ！」

望「麻美にあんな態度取ったのに、、、」

麻「そんな事は小さい事だよ！笹木サンに連絡は？」

望「ずっと連絡が取れないの（泣）」

麻「すぐ行く。思考停止しておいて」

望「ありがと、、、（泣）」

危ないところだった。テラちゃんにサイレントナイトは無理だ。友達として、女として、私が支える。笹木サンも私がつかまえる。まだグレーだけど、8割はやり逃げ野郎と変わらない。どっちがいいとかいけないとかじゃない。少なくとも妊娠は一人じゃできない。だけど、テラちゃんには現実を見て貰う事になるかも、、、。何がハレルヤだ！とんだ日だ！

*クリスマス色は、古典色には無いです、、、。

流行もあるし、お好きな色を充てて下さいね。

鉛色（なまりいろ）の望と麻美

望「ごめんね、、、」

麻「困った時の友達が真の友だよ。電子レンジ借りるね」

望「柏木サンが、食欲ない私を見て、ひょっとして妊娠してるかって聞いたの」

麻「何も食べてない顔だよ。まずは、このケーキ食べて。崩れちゃってるけど」

望「失礼な事言わないで下さいって言った後で不安になって二回調べたの」

麻「フォアグラ丼だよ。食べてみて」

望「彼、避妊してくれてたわ、、、」

麻「アレでしょ？完璧じゃないって知ってるよね？」

望「麻美、、、悪いけど、これ甘くて脂っぽくて今はムリかも、、、」

麻「パセリのポテトサラダならどう？」

望「美味しいわ」

麻「良かった！それはそれ、これはこれだから、クリスマスしようね」

望「浮かれる必要はないと思うけど、ケーキ食べただけでホッとするわね」

麻「そうだよ。で、笹木サンに話す前に病院に行かなきゃならないと思う」

望「日を変えて二回も陽性なのに、、、」

麻「事は重大なんだから、そうするの！」

望「柏木サンに謝った方がいいかな」

麻「自分がどんだけ危うい立場か分かって言ってる？」

望「不倫で会社クビになるかな？」

麻「会社はいいよ。奥さんいる人の子を妊娠した事だよ」

望「彼に困った顔されたらショックで生きて行けない、、、」

麻「奥さんと実質終わっていても、テラちゃん存在で慰謝料請求されるよ」

望「そんな！」

麻「法が守っているのは奥さんだよ」

望「妊娠の実感が無いわ、、、。彼はちゃんと、、、」

麻「危険日に会って、中で抜けたりしなかった？」

望「毎日だって会いたかったのよ？（泣）」

麻「人間って、無様なミスをするから、、、」

望「どうやって彼に知らせよう、、、」

麻「???電話すれば？」

望「会社の番号しか知らないの。席を外してますって毎回言われるようになって、、、」

麻「テラちゃん、、、それって、避けられてるって事じゃないの？」

望「何か誤解されたんだわ、、、」

麻「あっちはこっちのうちまで知ってて、、、。確信犯だったんじゃないかな、、、」

望「もて遊ばれたの？（泣）」

麻「そうじゃないけど、いつでも逃げられるようにしていた、、、」

望「自分の子ができたと知ったら何か気持ちが変わらない？（泣）」

麻「人によると思う。妊娠を武器に使っちゃダメだよ？」

望「男の責任は無いの？（怒）」

麻「今更遅いけど、自分の身は自分で守らなきゃいけなかったんだよ」

望「愛する人を警戒しなきゃいけないの？（怒）」

麻「彼も楽しくて幸せだったと思うけど、一人勝ちな人だよ」

望「??？」

麻「自分ルールで生きているから、自分に厳しいようでズルい歩き方ができる」

望「ええ、私が何を頑張っても響いてなかったわ、、、」

麻「でもさ、テラちゃんと赤ちゃんを喜んで受け入れるかもしれないよ？」

望「嘘でも嬉しい。ありがと、麻美、、、」

麻「身体に障るから、もう寝ようね！」

独り暮らしは平気なつもりだったけど、こういう時に側に人がいてくれると楽になるわ。妊娠なんて初めてで、それだけでも怖い。病院は、麻美が勧めてくれた吉祥寺まで行こう。そこは目立たないって事だから。女は皆、こんな思いをするんだろうか。薄っすらと妊娠したらどうしようって常に頭にあったわ。結婚すれば、堂々とセックスできるし妊娠できる。それもなんだか嫌悪感を覚えるわ、、、。結婚してた時、早く赤ちゃん欲しいでしょうってそっちこちで言われて不快だった。ヤッテません！って言いたかったっけ。婦人科、、、行きたくない、、、。恥ずかしいし、お腹大きい女性を今は平常心で見るとはできないわ、、、。

表に出たら、自然と大きな溜息が吐いて出た。麻美は手書き地図をくれたけれど、医院の名前は覚えていないとの事だった。吉祥寺は、案外駅の近くに住宅地がある。そこに紛れるようにそれはあった。目立たないというより、古ぼけた医院だった。斜め前には旅館風のホテルがあり、ひと気はなかったけれど見ないようにした。日陰の女という言葉が浮かんで来るのは、その医院のせいじゃないと思うようにもした。待合室の照明は暗かった。自分が貧血を起こす手前だったのかもしれない。いつでも逃げ出せるように、入り口の側の背もたれの無いシートに浅く掛けた。自分は、肝が据わっていない女だと思った。何人かが順番を待っていたが、夢の中のよう静かだった。そうだ、きっと夢なんだ。なんて長い夢なんだろう。名前を呼ばれた。ああ、そんな大きな声で呼ばないで、、、。ご結婚は？と聞かれたんだっただろうか、自分から思い詰めて言ったんだっただろうか。処置すると決めたら連絡するようにと言われた。兎も角、彼に連絡しなければならぬ。逃げ回る彼を掴まえるには、あの方法を取るしかないだろう。

* 歌舞伎で助六が頭に巻いている病鉢巻の色

笹「どういう事！？オレを社会的に抹殺する気！？（怒）」

望「やっと電話くれたのね、、、」

笹「妊娠って何だよ！？（怒）倉田サンにしゃべる事かよ！？（怒）」

望「事の重大性を分かって欲しかったのよ」

笹「倉田サンに弱みを握られたじゃないか！（怒）」

望「彼は、あの事件の時に庇った私を悪いようにはしないわ」

笹「自分の同僚じゃないから気楽な事を言えるんだよ！（怒）」

望「ごめんなさい、、、。だけど、会って貰えるわね？」

渋谷も、繁華街でない方は、太い道路が走るばかりだ。あんなに会いたかった人だったけれど、別人のような顔をしていた。そして、自分は、この人がこういう顔を持つ人だと気付いていたという思いが悲しい。一言もクチをきかずに、彼は黙々と駅から離れて行く。そう、スーツもコートもペラペラの安物。ネクタイもそうなので、ちゃんと結んでいても振れてしまう。人をそんな事で見下す人間になりたくなかったので、逆の男達の努力も認めて来なかったと思う。真冬の戸外を歩かせて、赤ちゃんの心配はしてくれないだろうか、、、。

笹「それで？（怒）」

望「え？」

笹「用があるから会いたって言ったんでしょ？（怒）」

望「どうしたらいいかと思って、、、」

笹「産めないでしょ！（怒）」

望「産みたい、、、」

笹「オレが産んで欲しくないの！（怒）」

望「どうして？」

笹「困るから！（怒）」

望「どうしても？」

笹「父親がいない子は産むべきじゃないでしょ！（怒）」

望「ここにいるわ」

笹「避妊してたでしょ！？（怒）」

望「麻美が言うには、あの方法は万全じゃないって、、、」

笹「！？いったい何人にしゃべったの！？（怒）」

望「お願い、やめて、、、。赤ちゃんが怖がる、、、」

笹「怖いのは君だし、怖がってるのはオレだ！」

望「一人で産むのもいけないって事よね、、、」

笹「冷たくされた腹いせ？」

望「今でも愛しているわ、、、。腹いせなんて、、、」

笹「じゃあ、最後のお願いをするよ。もう、付きまとわないでくれ！」

麻「テラちゃん？テラちゃん？泣いてちゃ分からないよ。どこにいるの？」

望「・・・しぶや、、、（泣）」

麻「30分で行くから早まらないで！」

麻美がいろと言ったスクランブル交差点のカフェは遠くない。だけど、ずっとここで彼が戻って来るのを待ってちゃいけないだろうか、、、。寒い、、、。もっと冷えて、このまま気を失ってしまいたい、、、。歩きたくない。こんな目にあって尚、歩けるなんて嫌だ。

藤「望??？」

望「・・・」

藤「もしもし??？」

望「・・・」

藤「何かあった？」

望「何も無い、、、」

藤「今どこ??？」

望「分からない」

藤「高速の音??？」

望「・・・」

藤「寒くない??？」

望「分からない」

藤「迎えに行くよ？」

望「麻美が来てくれる、、、」

藤「なら良かったけど、オレにもいつでも電話して？夜中でも、、、」

望「ありがと、、、」

そうだ、麻美がいてくれる。タケシだって、、、。あの看板の所まで歩いてみよう。ほら、歩けた。じゃあ、次はあのネオンまで。ネオンが揺れるのは何でかな、、、。

*この件は、まだ続きます、、、。

麻「ジャ〜ン！散らかってて驚いた！？入って、入って！」

望「突然ごめんね、、、」

麻「このモコモコに座って！掃除はしてるから安心して。ハウスダストアレルギーだからね」

望「本当に倉田サンは大丈夫だと思うの。それは心細かったでしょうって言ってくれたわ」

麻「圧力かけなきゃ会って貰えてないよね！一人で決められない事なのに」

望「その前に川越に行ったの、、、」

麻「????」

望「川越に住んでるって聞いてたから」

麻「川越ってだけじゃ、、、」

望「交番で、ササキアヤトさんのお宅を探してるって言ったわ」

麻「で？」

望「住所を尋ねられて、分からないと答えたら、それじゃ分かっているけども教えられないって」

麻「・・・（泣）」

望「妊娠してしまったので、どうしても連絡を取りたいって言ったけど、、、」

麻「（泣）」

望「警察は民事不介入なのでって、、、（泣）」

麻美が自分の事のように泣いてくれている、、、。肩に巻きつけた腕に力を込めて、背中をなぜてくれている、、、。だけど、彼の形相は頭の中から消えない、、、。

麻「テラちゃんは、産みたいのね？」

望「正直に言うと、彼に会うまではハッキリしてなかった。顔を見たらクチをついて出たの、、、」

麻「妊娠を実感したんだね、、、」

望「生を受けたのに生まれて来られないなんて、この子に対してフェアじゃないわ」

麻「妊娠した途端、女は母親になるんだよね」

望「でも、産まないでくれって（泣）」

麻「男が嫌いな言葉のひとつが妊娠だからね、、、」

望「それをキッカケに結婚する男の人だっているじゃない」

麻「結婚出来る状況ならね。観念しちゃうタイプもいるだろうし」

望「父親から望まれてない赤ちゃんなんて可哀想（泣）」

麻「私、妊娠して捨てられて墮ろした事あるんだ、、、」

望「！？いつ！？」

麻「大学二年の時。避妊も曖昧だったし、、、」

望「ダメじゃない！？」

麻「もう無いけど、いいだろう？大丈夫だよって言われると嫌われたくなくて拒めなかった」

望「同じ歳の人？」

麻「ウン、、、やりたい盛りだよ（苦笑）。妊娠したと知ったら、オレは関係ないからな！

って、、、」

望「関係ない！？（怒）」

麻「そういう男だったの。前の人と別れて寂しかったから付き合った私が悪い」

望「ムリと思うけど、一人で産むって気にはならなかった？」

麻「つわりが始まったら人にバレる、急がなきゃ、、、としか考えられなかった、、、」

望「もしかして、教えてくれた病院って、、、」

麻「そう。私が行った産婦人科。おめでとうございま〜す！的な明るいトコは行けなかったから

」

望「一人で探して行ったの？」

麻「彼の友達が、彼に対して腹立てて世話してくれたの」

望「味方がいて良かった、、、」

麻「送り迎えもしてくれたんだけど、お医者さんに叱られてた（笑）」

望「どうして？」

麻「自分の彼女を守れない男は、セックスする資格が無いって（笑）」

望「冤罪だわ、、、。むしろ、男らしい人なのに、、、」

麻「同意書のサインがヤツだったし、素直に医者に謝ってた（笑）」

眠れないと思ったけれど、ウトウトしたらしい。起きると麻美の姿は無かった。丸っこい字のメモが置いてあった。メモに従って、借りたパイル地の部屋着を含めて洗濯して、軽く掃除して、麻美の食事を作った。ゆっくりやったつもりだったけれど、暇を持て余した。少し瞼の腫れが気になったが、会社に行く事にした。在籍している以上、そうそう休んでいるわけにいかないと思った。麻美が自分は今日も休むと柏木サンに電話してくれたらしいが、邪魔にはされないだろう。彼に会社が大切なように、自分にも大事な居場所だった。失うつもりは無い。彼と家庭を、、、という儚い夢が途切れた今は、尚更だった。

しかし、人間は、頭が痺れた状態で何かを判断する時、いつもよりリスクが高くなっている。充分心をえぐられた望に、昼ドラみたいな災難が降りかかるとは、自分のアパートに望がいると信じている麻美にも藤野にも予想出来なかった。あとは、その災難が一過性のものである事を祈るばかり、、、。こうしている今も、刻一刻と、望のお腹は膨らんで行く、、、。麻美も昔怯えたように、ホラー映画より恐ろしい状況と望が感じていても責められまい、、、。

紅消鼠（べにけしねずみ）の望

望「遅くなりました。ご心配おかけしましたが、もう」

柏「あ！手羅さん！良かった。総務から内線。来客」

望「？ありがとうございます。すみません」

柳「柳です。ササキ様がおみえです。お約束ではないとの事ですが、、、」

望「大丈夫です。すぐ行きます」

柳「4F受付にお願い致します」

彼が来てくれた！思い直してくれたんだろうか。でも、会社に来るなんて大胆。柳ちゃん、声が緊張してたわ。

柳「望サン！こっちです！」

望「？？？柳ちゃん？？？」

柳「お客様は、赤ちゃんらしきものを抱いた女の人です」

望「！！！！？」

柳「怖い顔をして、戦闘モード全開って感じです」

望「ごめんなさい、、、」

柳「あやまんなくっていいです。返り討ちにしてやって下さい」

望「急いだ方がいいわね、、、。ごめんね」

柳「何があったか知りませんが、頑張ってくださいね！」

柳ちゃんは、大きく脚を開いて踏ん張り、両手で銃を撃つマネをした。彼の奥さん、、、。待ち受けたというように、人目も憚らずに挑んだ眼差しを向けて来た。こんな敵意のある目で誰かに見られた事があったろうか、、、。この人が彼の奥さん、、、。地下のカフェを使う事にした。社員達の視線が痛い。思い過ぎだ、、、。しかし、エレベーターを待つ間も、乗っている間も、石になったように言葉が出ない。背中に視線が刺さっているのが分かる。それは思い過ぎなんかじゃない。メラメラと、という表現は文字通りであったんだ、、、。奥の方の席に掛けて貰う。

妻「重役出勤？」

望「ちょっと体調が優れず、お待たせして申し訳ありませんでした」

妻「笹木から話は全て聞きました。妊娠の責任を擦り付けているとか？（怒）」

望「奥様には大変申し訳ない事だと思っておりますが、責任のお話ではなく、、、」

妻「誰とでもそういう関係になる女だと聞きました。彼の子じゃないとも」

望「！！！！？」

妻「手練手管で誘惑されて、一度だけ関係を持って妊娠ってあるかしら？（怒）」

望「！！！！？」

妻「妊娠して困っているんでしょ？ご立派な会社勤めですものね」

望「困るだなんて、、、（怒）。産もうかと考えているのに、、、」

妻「子供を産むってどういう事か分かって言ってる？（怒）」

望「彼の気持ちも尊重したいですけど」

妻「あのね、あなたね、私がこの子を産む為に実家に行った時なのよ？」

望「存じあげませんでした、、、」

妻「私がないスキにつけこむなんて汚い女！」

望「本当に知りませんでした、、、（泣）」

妻「ふん、そうやって弱い女を演じて男をたらし込むんだ？（怒）」

望「決してそんなつもりはなかったです、、、（泣）」

妻「じゃあ、どんなつもりなられっきとした妻がある男を啜え込めるのか説明しなさいよ！」

望「申し訳ありませんでした、、、（泣）」

妻「まだ生まれたばかりで、こうやって連れ出すのは危険なのよ？（怒）」

望「（泣）」

妻「この子にまで何かあったら、あなたのせいよ！？（怒）」

望「！？（怒）」

妻「母親の気持ちなんて、あなたには一生分からないわ！（怒）」

望「（泣）」

妻「かかって来なさいよ！女相手に泣き落としは通じないわよ？（笑）」

望「（泣）」

妻「いい気味だわ（笑）。これ、中絶費用よ。せがんだんでしょ？（怒）」

望「！？頂けません！！（怒）」

妻「あら、そう？実家の親が驚いて都合してくれたのに」

望「要りません、、、」

妻「あなた、もう若くないから焦ったんでしょ？惨めな人。人として最低ね」

柏「手羅さん？？？やはりまだ胃が良くなってないのね、、、顔色が酷いわ」

望「大丈夫です、、、」

柏「ムリしちゃいけないわ。今日はお帰りなさい」

望「あの、、、やはり処置をお願いしたいのですが、、、」

女「明後日から年末のお休みになりますので、明日朝一番でしたら、、、」

麻「テラちゃん！いないの！？」

藤「望！！！」

麻「どこに行ったんだろう、、、」

藤「もう少しここで待ってみよう」

麻「テラちゃん、、、（泣）」

藤「まだ、何が起きたか分かっていないんだから、、、」

麻「でも、笹木サンの奥さんが乗り込んで来て無事だった筈がないよ（泣）」

寒い。でも、テラちゃんはきっと、もっと凍える思いをしているだろう。

*紅の上に墨色を重ねたような暗い灰色味のある赤紫色だが、ほぼ黒に見える。

銀鼠の望その壱

望「ごめんなさいね、、、寝てたから、、、。片付けるわね」

麻「そのままでもいいよ！」

望「お茶淹れるわ」

藤「気を遣わないでいいから」

テラちゃん、元気ない。でも、思ったより落ち着いていてホッとした。

望「噂になってる？」

藤「別に噂になんかなってないよ。オレ達が様子を知りたくて、、、」

望「嘘は、もっと気合い入れて吐かないとバレバレ（笑）」

藤「笹木サンの奥さんが何だって？」

望「笑っちゃうわよ～（笑）」

あんまりだ！人間って人間に対して、そこまで残酷な事を言えるものだろうか、、、。自分こそ、親になったなら、テラちゃんのお腹の子にもっと違う感情を持たないんだろうか！

藤「これからどうする？」

望「朝イチで病院に行くわ」

麻「いいの？（泣）」

望「シングルマザーになる根性、私には無いわ（笑）」

麻「奥さんの作り話かもしれないから、言われた事は忘れてね。難しいだろうけど」

望「お似合いの夫婦よ（笑）」

麻「でも、同意書にサイン貰ってないんでしょ？」

望「彼からは貰えないわね。念書かかされたし（笑）」

麻「ねんしょ？」

望「彼とは、もう会わない、連絡もしないって、、、」

麻「普通、そこまではする！？（怒）」

望「だから、そういう人達なのよ。デスクに戻って印鑑まで突いたのよ？（笑）」

藤「むしろ、滑稽なヤツらだな。チキンと言うかさ（笑）」

麻「おかしくない！（怒）じゃあ、同意書は私が笹木サンの振りしてサインする！」

藤「手錠かけられたいの？（笑）オレの名前でいいでしょ」

望「えっ！？」

藤「女の人を妊娠させた事ないからさ～、嘘でも嬉しい（笑）」

麻「冗談にしないで！（怒）」

藤「真面目に自信なかったんだよ（笑）。ストレスで精子出てない気がしてさ（笑）」

麻「あは、そうだね、弱々しいのがチョロチョロって感じになってるかもよ？（笑）」
藤「望もさ、女性として身体が健康だと分かったね」
望「手術して産めない身体にならないとも言えないわ、、、」
藤「ドラマの見過ぎ！（笑）仕度して！今夜は麻美んちに泊まれよ」
麻「私はいいけど、車大丈夫？さっきから顔色が悪いんだけど、、、」
望「柏木サンにも指摘された（笑）。そんなに青い？」
麻「青いなら兎も角、、、土気色っての？酷いよ？」
望「吐いたせいよ。風邪薬を一瓶飲んで一生眠るつもりだったのに、、、（笑）」
藤「お前！」
望「麻美～、何よ、その泣き方！乙女じゃな～い！（笑）」
藤「二度とするなよ！（怒）麻美！ヒステリックになるな！（怒）」
望「うふふ、これも見て。切ってみたけど痛かったから止めたの（笑）」
麻「ばか、ばか、ばか～！！（泣）」
望「風邪薬で眠れたけれど、吐き気で目が覚めてゲボ～ッ（笑）」
藤「他にも隠してる事があつたら言ってしまうえ（涙）」
望「無いわ（笑）。明日の事だって、する事があって良かったと思ってる位よ（涙）」
麻「私、笹木と対決する！（怒）」
藤「よせ！（怒）」
麻「なんで？私は念書かいてないけど？（怒）」
藤「多分、お前の今の顔、笹木の奥さんと同じ顔」
望「憎々しさが負けてる（笑）」
藤「明日で、こっちから縁を切るんだ。リセットだ、望」
望「死ぬ根性さえ無い人間は生きるしかないわ（涙）」

フッチーも私も、なんて無力なんだろう。一瞬でテラちゃんは死ぬところだった、、、。外で立ってた時、私は自分がベストを尽くしているつもりになってたと思う。灯りが点いて、ドアが開いて、待ってた甲斐があつたと思つたけど勘違いだつた。駆けつけたのは、テラちゃんが死んだ後だつたも一緒だ。フッチー、テラちゃんに気持ちの負担をかけまいと冗談ぽく引き受けたんだな。私、一杯一杯で気付かなかつた。車の揺れ、大丈夫かな。（フッチーに横になってけと言われて）、もう妊婦であつて妊婦じゃないのに？って笑つた哀しい顔、、、。ダメだ、私がしっかりしなきゃ。なのに、この涙は、枯れるって事を知らないんだな、、、。いっそ、今、フッチーが事故つて3人キレイに死んだらいいのに、、、。ダメ、ダメ！一番の復讐は、苦しんだ分だけ幸せになる事！だけど、神様、あの夫婦、どうしても懲らしめてやって下さい！！（泣）

*銀の肌の色を感じさせるような鼠色。

金属の冷たい感触から、銀色を帯びた薄鼠を呼ぶ。

銀は古くから「しろがね」と呼ばれるように、「白」の系統に入る。

麻「テラちゃん！？大丈夫！！！」

望「あ、、、。崖が足元から崩れて、、、私飲み込まれて、、、」

麻「大丈夫、大丈夫。まだ、ちょっとしか眠ってないから、もういっぺん寝よう？（涙）」

望「眠るのが怖い、、、（涙）」

麻「うん、うん、そうだね（涙）」

望「私が母親じゃなかったら、この子は産んで貰えた（涙）」

麻「妊娠は事実だけど、テラちゃんは駆け引きしない恋愛できたんだよ？」

望「駆け引き？」

麻「笹木の前で純粹だった。それで、あっちのペースだったけど、、、」

望「純粹、、、。私なんて、ダークな女に成り下がったわ、、、」

麻「女ってズルいトコあるでしょ？ああ、男だってだけど。テラちゃん、今回はストレート勝負だった」

望「勝負？何も考えてなかっただけだわ、、、」

麻「それが羨ましいって言ってるんだよ」

望「羨ましい??？」

麻「フッチーと付き合ってた時、打算があるように見えたよ？ごめんね、こんな言い方、、、」

望「いいえ、そうね。笹木サンには何も求めなかったわ」

麻「賭けには負けたけど、結果って、戦うのを恐れている人には見えさえしないんだよ」

望「彼が憎いわ、、、。あんなヤツの子供なんか、、、（泣）。汚らわしい、、、（泣）」

麻「じゃあ、その子はテラちゃんの悪性腫瘍だから、明日取ってしまえばもう大丈夫だから（泣）」

望「!!!!？麻美！新しい命なのよ!？」

麻「ごめん、、、。嘘だよ、、、。逆だよ」

望「逆って??？」

麻「テラちゃんに何かを伝えにやって来た天使（泣）」

望「私には、天使に来て貰う資格は無いわ（泣）」

麻「縁あって来てくれたんだよ。それこそ打算抜きで。これからもママを守ってくれる、、、」

望「ママじゃないわ、、、」

麻「既にママだよ（泣）。今だって、自分の心配よりママの心配してるのを感じない？」

望「まるでメルヘンね（苦笑）」

麻「じゃあ、同じ事した私が一応生きていられるのはどうして？（涙）」

望「タフだから？（苦笑）」

麻「タフだったら、今頃結婚して子供バンバン産んでると思わない？（涙）」

望「ごめん、、、。私、自分ばかり辛いと思っていたわね、、、」

望「起こしてごめんなさい、、、」

藤「身体、辛くない？」

望「神経が麻痺したみたいになってる（苦笑）」

藤「いつも気を張ってるから丁度いいよ（笑）。麻美は？」

望「眠った、、、か、寝た振りしてくれてる、、、」

藤「身の引き方、偉かったな！」

望「心が狂っている人達に、理屈は通じないわ（苦笑）」

藤「いざって時に人間は本性が現れると思うよ」

望「でも、私だって結婚してる側だったら権利を振りかざしてたと思うわ、、、」

藤「望は、正しいと思った事をしようとするからな（笑）」

望「節度ある不倫をしてたつもりだったわ（苦笑）」

藤「好きになった男が、たまたま結婚してただけさ」

望「順番的に奥さんが先だっただけってやつね（笑）。厚かましい言い訳だわ」

藤「どうしてオレが望に優しいか知ってる？」

望「私を、、、好きだから、、、なの??？」

藤「自惚れるなよ（笑）。望はヘソ曲がりだから、優しくすると自分に厳しくなるから」

望「私をコントロールしてるの?（笑）」

藤「今は、自分がした事の責任を取る時だから」

望「彼のせいにしたら、彼や奥さんと同じ次元の人間に落ちるわ」

藤「望は、しっかりしてるけど、一回くらい人生の失敗もいいよ」

望「離婚は?（笑）」

藤「離婚が怖くて結婚できるか!（笑）」

望「ありがとう、、、。色々、、、ありがとう、、、」

そっと窓を開けた。痛い程の寒気。こんなに痛めつけられても、寒いだの暑いだの感じるものなのか。人間ってしぶといな。午前4時。車の音も少ない。世間の人々は、快く疲れてぐっすり眠っている。でも、じきに大型トラックが走り始めるだろう。平和だ。ミサイルが飛んで来て、明日ごと吹っ飛ばしてくれたらいいのに、、、。

最初に来た時より、一層薄暗い。自分の他に3人が距離を置いて、俯いて呼ばれるのを待っている。一人は40歳はいつているように見える。全員が中絶にやって来た女性だと分かる。全員から同じ臭いがしているから。不幸の臭い、、、。痩せ過ぎな女の子は、どう見ても学生。付き添いがいる者はいない。麻美は、彼の友達が付いて来てくれたと言っていた。自分達4人には、そんな人はいないように思う。皆、寒そうにしているから。ぎりぎりまで赤ちゃんを守るかのように、コートをお腹に当てているから。

男「私について数を数えて」

望「1、、、2、、、3、、、」

あ！処置を始めてしまった！麻酔が効かなかったらどうしよう！助けて！

う、、、。お腹が痛い。やはり、麻酔が間に合わなかった！？あれ？？？ここ、どこ？？？押入れみたいな部屋だった。二段ベッドがどうにか4つ設置してあって、そのひとつの下段に寝かされていた。冷たい氷でもお腹に当てられているかのような。触ってみたが、そんな事はないようだ。じゃあ、それ位痛むって事？多分、待合室で一緒だった女性が寝ているのが見える。ここにいたくない、、、。帰ろう。

女「何してるの！？」

望「あの、、、」

熊みたいな年配の看護師さんに見つかって、ひょいっと抱え上げられて驚いた。奥まった病室に運ばれた。空き部屋らしい。彼女が自分の目を覗き込んだ。バツが悪い。

女「そうね。あと15分経って、帰れると思ったらいいでしょう。誰にも挨拶しなくていいわ」

望「はい、、、すみません、、、」

彼女は、微笑んで布団をポンポンと叩き出て行った。けれど、ドアを閉める前に言った。自分を責めないでいいのよ。人には色々な事情があるものよ。15分計る事にした。ここにいると緊張で大声でも出そうになる。言葉にならない、わあ！！！！とか、ぎゃあ！！！！とか、そんな、、、。

15分。長いのか短いのかよく分からない内に経った。足元はさっき程ふらつかない。受付を素通りした。そうだ、自分は気を遣い過ぎなんだ。こういう時は、これでいいんだ。横断歩道じゃなかったけれど、早く病院から離れたくて車が遠いのを確認して横切った。クラクション。危ない！遠くに感じた車がどうして？？？ああ、きっと麻酔のせいね。

麻美のアパートに戻ると、メモがあった。出来るだけ早く帰るね！シチューあっためて食べて！絶対に食べる事！思いやりが嬉しかったので、ガスを点火した。ハッとすると、鍋がグラグラで、焦げた臭いがした。側についていながら、、、。時間はたっぷりある。後でゆっくり洗っておこう。麻美のカフェオレカップで食べる。美味しい。お腹が空いていたと気付く。今更のように涙が後から後から流れて来た。こんな悲しい時でも人間はお腹が空くと知ったから。麻美が言いたかったのは、これだったんだろう。さあ、だから、もっと食べて。天使の分も。

紅梅色（こうばいいろ）の奈々子

奈「はっぴ、はっぴ、はっぴい、はっぴにゅ～いや～」

和「奈々子サン！ダサイよ！何その限りなくディズニーっぽいハミング、、、」

奈「あ！来た！どうぞ～！（喜）」

陽「お邪魔します」

和「あがって～（喜）」

奈「お疲れ様～。今このピクルス炒めたら終わりだから、先に飲んでていいわよ」

陽「・・・」

奈「今日はエスニックだから、チャイナドレスで来ようかと思ったんだよ（笑）」

陽「それ見たら、お邪魔しました～ってUターンしてましたね」

奈「ホント！？よしておいて良かった（笑）。できた～！和正くん、お皿」

また陽河くんに会えて嬉しい。髪、短くなってる。

奈「和正くんの餃子は絶品だよね～。陽河くん、こっち面白いから食べてみて」

陽「あ、美味しいですね。ピクルスって聞いた時は心配だったけど」

奈「好き嫌いないって言ってなかった？」

陽「ハンバーガーにピクルスを入れる意味が分からない」

奈「ああ、あれは不味いんだよね。美味しいピクルスは美味しい」

和「ホントだ！旨いよ、奈々子サン！」

奈「タイ野菜のピクルスなのよ。春雨もタイのを使ったわ」

陽「これ、、、」

和「やった！サンキュ！」

奈「？」

和「陽河の実家の近くの日本酒」

奈「九州でお酒？？？」

和「あ、バカにするなら飲ませないよ？すごく旨いんだから！」

奈「お正月、実家だったの？」

陽「ええ、オレは」

和「オレは、着付けがあったし、仕事だった」

奈「いつまでもうるさい、、、。何度も聞いた、、、。今日は何か変わった事あった？」

陽「そうですね、、、。髪の毛がバーコードみたいな男性客のシャンプーに気を遣いました」

奈「ぷっ（笑）」

陽「1本でも抜けないようにしました。9対1位なので長くて、、、。みによ～んって感じで、、、、」

和「がはははは！分かる、分かる！」

奈「くくくくっ（笑）。大変だったわね」

和「そうだ！3人で、これまでで一番恥ずかしかった事を告白大会しよう！」

奈「恥ずかしかった事？う～ん、咄嗟に思いつかない、、、。陽河クンから！」

陽「ん～、そうですね。煙草に火をつけようとして、睫を燃やした事があります」

和「バカだ！マヌケだ！（大笑）」

陽「一瞬で燃えました。それもマヌケでしょうけど、その後、生えて来る間がマヌケで、、、」

和「奈々子サン！笑い過ぎ！起きて！！！」

この長い睫の片側が、全く無い状態だなんて。長いから引火したんじゃないかな、とか考えたら笑いのツボ！

陽「ちょっと失礼します、、、。はい。はい。分かりました。ええと、先輩のうちでご飯を、、、」

和「あ、オレも来た（笑）。お疲れ様でっす。はい。はい。了解でっす」

奈「何？？？」

陽「明日のシフトの確認です」

奈「ふ～ん、、、鬱陶しいわね～。今の相手、女でしょ」

陽「そうですね？」

奈「その人、陽河クンに気があるでしょ」

和「嘘！どうして分かるわけ？？？」

陽「オレも気付いてましたから、距離置いています」

和「え！？誰！？」

奈「聞くなよ。仕事がやりにくくなる。で、年上？」

陽「一応」

奈「タイプじゃないの？」

陽「仕事場の人間と付き合う気がないので」

奈「勿体無い」

陽「音楽、変えていいですか？」

陽河クンのバッグには、結構CDが入っていた。ジャケットを見せて貰う。オシャレな曲だったから。ドイツのTVアニメの曲だろうと言う。確かにドイツ語。マリオネットみたいな人形の子とロボットのジャケット。ひと昔っぽい。さっきの着メロも何だったっけ。私でも知ってる。昔、流行ったと思う。ええと、ハッスルだっけか。どういうチョイスなんだろう。でも、彼に合ってる。渋いオレンジ色のケイタイも。ストラップはなし。彼らしい。

奈「明日早番なら、陽河クン、そろそろ、、、」

陽「そう？」

奈「途中まで送ってくね」

和「は？」

陽「じゃあ、、、。ご馳走様でした」

なんでだろう。今夜は腕を組めない。

奈「陽河くんって料理は？」

陽「しないなんてもんじゃないです。冷蔵庫に塩しか入ってない」

奈「ゲッ！」

駅をやり過ごし、セブン（コンビニのセブンイレブン）の先の坂を下る。住宅地だ。静か過ぎ。

奈「陽河くん、、、。私、帰り道が分からなくなったら困る」

陽「そうですね」

奈「それで、、、。陽河くんに一生のお願いがあるんだけど、、、」

陽「言ってみて」

奈「ケイ番おしえて貰ってもいい？」

陽「そんな事か。いいですよ」

奈「たっだいま〜！」

和「お帰り。結構早かったね」

奈「陽河くんのケイ番ゲット〜！」

和「マジ！？どうやったの？あの人、絶対誰にも教えないんだよ？」

奈「和正くんは知ってるじゃん？」

和「社長にパーティーの準備を任された時に手伝って貰うって口実でね。で、どうやったの？」

奈「教えてって言ったら、あっさり（笑）」

和「そんな〜、、、。女はいいなあ〜」

奈「さっきの女も知ってたじゃん」

和「ローテ組む担当だからね、、、。陽河がね〜、、、。へえ〜、だ！」

一生のお願いだと頼んだ事は、クチが裂けても言えないな。和正くん、陽河くんはムリだと思う。妬いたって始まらないわ。

彼が、何に対してどうヤキモチを妬いたのか、まだ、奈々子が気付くには時間がかかる、、、。

*早春に花咲く紅梅。かすかに紫味のある淡い紅色。

鴉羽色（ときはいろ）の麻美その壱

係「彼女、岬ちゃん。まだ学生さんだから、麻美ちゃん色々とリードしてあげて」

麻「私も今日が初めてなので、、、えっと、よろしくネ」

岬「うふっ」

麻「?（まあ、悪い子じゃあなさそうかな、、、）」

女「こんばんは～。いつもお世話になります～。じゃあ、早速」

係「行ってらっしゃい！」

ええ!?ガード下の店に向ってるよね???コンパニオンのバイトだから、なんかもっとイカシた感じを想像してた、、、。このオバサンって、保険の外交員だよな?むっちりした人だなあ。人の事あんまり言えないけど、パンプスが型崩れしてる、、、。靴に同情、、、。

女「とてもイイ方よ。気楽にしてね。勧められたものは食べて、お酌を欠かさないでね。あ！」

オバサンは、話している間も店の入り口から目を離さなかった。そっか、客を待ってたんだ。おっと!しかも、出迎えに!ああ、靴が可哀想、、、。

男「やあ、遅れてしまって、、、」

女「こちらも今来た所ですよ～。岬ちゃんと麻美ちゃんです」

男「よろしく」

女「ささっ!若い子のお酌で!麻美ちゃん！」

麻「は、はい」

うお～、手が震える。相手は無骨なオッサンだけど、仕事だと思うからかな。

女「社長サン!今日は、海ぶどうがあるみたいですよ？」

男「それ、何?すまないね、何も知らなくて、、、」

岬「海草ですよ。沖縄の。美味しくないんで知らなくていいです(笑)」

女「若い子には、さっぱりし過ぎているかもしれないわね」

麻「私、一回ちょこっと食べた事しかないので頂きたいです」

女「貴重よね～。お魚や煮物、適当でいいですか？」

男「麻美ちゃん?麻美ちゃんて良かったっけ?麻美ちゃん、好きなもの頼みなさい」

麻「ありがとうございます。(高いものがいいのか???)ししゃも、、、いいですか？」

男「いい子だねえ。田舎を思い出すよ」

麻「どちらですか？」

女「元々は茨城の方よ。食べ物が美味しくて、人が素朴ないい所よ。お酌して？」

麻「(シマツタ!)は、はい、、、」

岬「イバラギって、ししゃもが取れるんですか？」

女「イバラキよ、、、。社長、確かワカサギでしたよね？」

男「うん。あとね、子供の頃にゴロを取ったよ」

麻「魚ですか??？」

男「霞ヶ浦に繋がってる川でね、エビをすくおうとするとゴロばかりなんだよ(笑)」

岬「そのゴロが何だか分からない」

女「桜エビ程度に小さい魚でしたわね??？」

男「そう、そう。茨城は佃煮も旨いんだよ。ゴロは佃煮にしたよ」

女「岬ちゃんは、イケルくちね。飲める子の方が盛り上がっていいわね、社長？」

男「社長はよしてくれよ(笑)」

やっぱり！こんなくたびれたスーツのオジサンが社長のワケないと思ってたよ。カフスもしてないし、、、。が、オバサンの雑学は大したものだなあ。岬ちゃんって、これが仕事だって自覚なしに、お言葉に甘えてガンガン飲み食いしてるし、ろくな事言わないけど、オバサンはフォローもしてる。営業の人って、女でもこういうもんだよね～。勉強になるなあ。いろんな方のお相手してたら、いろんな世界も開けそう。コンスタントに仕事入るといいなあ。

*特別天然記念物で、国際保護鳥「トキ」。

翼の裏面が、この色。飛んでいる時に見えるはずです。

薄い紅色。桃色な感じです。

係「麻美ちゃん、スケジュールOKで良かった！」

麻「こちらこそ、ありがとうございます！」

係「お客様に気に入って貰えて良かったね！また茨城の話がしたいんだって」

麻「あの、、、もしかして、同じ男の方ですか？」

係「そうだよ？良かったね！」

麻「えっと、、、申し訳ないんですけど、同じ方はちょっと、、、」

係「何言ってるワケ？仕事、ちゃんとしようよ！（怒）」

麻「同じ方とは、お断りしたいんです、、、」

係「どうしても？（怒）」

麻「はい、、、」

係「分かった！（怒）」

藤「へえ～、コンパニオンも言い様だね、、、」

麻「でしょ？ただで飲み食いつたって、食べた気しないしさあ」

藤「気が進まない仕事は一切なくていいよ。会社辞めた意味がなくなる」

麻「なんかさ、、、二度三度会って、気安くされるのイヤなんだよね、、、」

藤「分かるよ。だけど、もう、依頼は来ないかもしれないな」

麻「いいよ。向いてなかったんだよ」

藤「まだまだ、どんどん色々やってみろよ」

麻「ウン！だけど、やっぱり、何故か傷付いた～」

藤「そうだね。その男の怒り方、上目線で子供っぽい」

麻「自分トコのコンパニオンを大事に思っていないよ」

藤「オレだって、便利に使われているだけで大事にされてないぜ？（笑）」

麻「課長代理にして貰ったじゃん」

藤「給料据え置きで、仕事は増えた（笑）」

麻「役職手当ないの！？」

藤「貰ってないよ。確認もしてないけど、、、。カッコ悪いから（笑）」

麻「お金の話って下品だよね、、、」

藤「収入や貯金や運用の話はされたくないかな」

麻「最近、結構うちにいるせいか、営業の電話取る事が多いの」

藤「ルス電にしておけば？」

麻「バイト先からの連絡かもしれないし、モニター会社かもしれないし」

藤「モニター？」

麻「いろんなりサーチ会社の座談会に出ると1万円とか貰えたりするから」

藤「おいしいじゃん！？」

麻「希望した全員が呼んで貰えるわけじゃないから、まだ行った事ないよ（笑）」

藤「座談会なんて面白そう。行ったら報告して」

麻「うん、、、で、営業の電話だけどさ。奥様ですかってかけて来るの。頭悪いよね」

藤「頭悪いね」

麻「違いますって言うと、奥様いらっしゃいますかって、、、。つくづく頭悪い、、、」

藤「オレなら、社員教育するかクビにする」

麻「面倒くさくなって、母はいませんって答えるの」

藤「あはは」

麻「したら、お父様のお戻りは何時頃ですかって聞かれる、、、。バカじゃん？」

藤「朝帰りって言ってやりな」

麻「別の手も考えたの。この時間うちにいるからって奥様とは限らないし、暇でもないって言うの」

藤「相手、脳みそ少ないから困るだろう？（笑）」

麻「ううん。現在、保険にはご加入ですよな？とか聞く」

藤「人の言う事を聞かないヤツの言う事なんか、聞かなくていいぞ？」

麻「入ってるって答えても、当社ではって説明が始まるの」

藤「わざとだとして、マニュアルだとしたら、その会社の保険だけは入らないな」

麻「そう思うんだけど、とても多たって事は、入る人がいるからだと思うんだよね、、、」

藤「麻美、変なところで世慣れて来たねえ（笑）」

麻「毎日が仕事探しだし、新鮮というか精力的になるしかないよ（笑）」

藤「身体は気をつけるよ？」

麻「少し運動不足になったな、、、」

藤「足腰鍛えておかないと、バアサンになってから悔やむぜ？（笑）」

麻「あの、、、」

藤「何？」

麻「テラちゃんに電話してあげてる？」

藤「してないけど、会社で普通に見えるよ？」

麻「そう見せてるだけに決まってるじゃん」

藤「電話した方がいいの？」

麻「・・・いや、そういうわけじゃないけどサ、、、」

藤「変なヤツだなあ。言いたい事があるなら言えよ」

麻「毎日、フッチーの顔が見られるテラちゃんはいいなあ」

藤「ますます変なヤツだなあ。ほぼ毎日オレに電話して来てるクセに」

麻「疲れてるのに、ごめんね、、、」

藤「はあ～、、、。そんな事、責めてねえし！」

麻「仕事探しってキツイ、、、」

藤「当たり前！オレ、二度と就職活動しないつもり。じゃなきゃ、とっくに辞めてる」

麻「ちっくしょお！負けないゾ！」

藤「そうだ！その意気込みで行け！」

麻「オオッス！！！」

紅梅色の奈々子その弐

和「お待たせ～」

奈「サンキュ～」

和正くんは、ファッション雑誌のモデルみたいだ。ちょっと猫背だけど、きっと身長は陽河くんくらい。顔が小さくて、クリクリとした目をしている。いつも寝不足で、クマが消えないけど。こうして、社販で安く買ったシャンプーとトリートメントの横流しをしてくれる。気が利いているし、優しい。今日は、ラーメン屋さんだという。そして、どうしても、つけ麺を食べろという。とっても頑固。

和「あ、奈々子サン、髪の毛、髪の毛、、、」

奈「お、ダッカード」

和「素人のクセに、よく名前知ってるね～」

奈「着付けのついでに、自分で逆毛を立ててアップにする講習受けたからね」

和正くんのバッグは大きい。そこら辺りは、女の子みたいだ。そこから、いつも色んな物を取り出す。今は、食べ易いように髪を業務用クリップで留めてくれた。女の子にモテるだろうに、ちょっと勿体無い。こうやって、お店を見つけて来るのが得意。買い物、映画、美術館、画廊めぐり、華展、おうちでご飯など、何を一緒にしても楽しい。

最初は、和正くんが活けていると知らず、カウンターの花をホメたのがキッカケだったと思う。送りたい画像があるから、メアド教えてと屈託なく請われた。でも、それは、彼が活けた花じゃなくて、有名アーティストの花の絵だった。美術も好きと知って、学芸員の友人らがくれる招待券を和正くんと消化するようになった。華展は、華道家の知り合いから貰う。自分は、会社の外では結構コネコネ人間だ。

和正くんは、とてもほがらか。だけど、ある日、告白したいと言われた。とんでもない告白だったけど、それを聞かされた後って、付き合い方を変えなきゃいけなくなったって事かと尋ねたら、そうではないと言うので、じゃあ、気にしないと返事した。でも、以来、奈々子サ～ン！聞いてよ～！と恋の悩みの電話が来るようになった。男同士で住んでいる人のうちに行ったら、もう終電ないよと言われ、酒も入っていたし泊まる事にしたら、彼らが始まってしまって、自分も手でヤラれてしまったとか、かなりキツイ話も多い。ケイタイのサイトで相手を物色する。大概、会って見たけどピンと来なかったとガッカリする。やたら一喜一憂し、本人が言う所の大失恋をした時、寂しくて、このままだと死んじゃうから泊まりに来てと召集された。が、一晩中、腕枕してくれた。頭って重いね、腕が痺れたよと嬉しそうだった。もっとも、その翌朝は、起きたら彼は仕事に行った後で、メモが残っていた。冷蔵庫のアイス、食べていいよ！可愛いと思う。時々だけど、叱ると、面白くなさそうに、なるほどねえと負けを認める。

和「陽河から電話来た？」

奈「こっちのは教えてないの」

和「なんだ、それ??? こっちからは、かけた？」

奈「和正クんに、差し入れを頼んでおいたよとか、ルス電入れてるよ」

和「あんまりパツとしないなあ〜」

奈「大した物を差し入れてないしね（笑）」

和「あ！ケイタイ！ケイタイ！」

奈「！？噂の人だ！！！」

和「早く出て！！！」

奈「もしも〜し」

陽「お疲れ様です（笑）」

奈「お疲れ様です、、、」

陽「おにぎり、旨かったです。今日食べました」

奈「え！？渡したのって、一昨日だよ！？お腹大丈夫！？」

陽「手違いがあったみたいで。冷蔵庫にあったから大丈夫です。腹も強いし（笑）」

奈「変なおにぎり、、、、（笑）。じゃあ、あげるなって話だけど（笑）」

陽「ちらし寿司のおにぎりに、スクランブルエッグでなんて驚きのアイデアです」

奈「色がキレイだし、タンパク質とれると思って」

陽「ご馳走様でした」

奈「わざわざ、ありがとう」

和「やったじゃん！」

奈「どうして、今回に限って電話くれたんだろう」

和「何度も貰っているから???」

奈「義理で何かする人と思えないわ」

和「こっちは教えてなかったから、一応遠慮してたんだよ」

奈「そこが狙いだったんだよね〜（笑）」

和「あ、なんか、エッチな事でしょ」

奈「あんたと一緒にしないでね！」

彼なら、きっと思慮深いから、教えてはいないので電話しにくいと考えると計算した。が、余程嬉しかったら、絶対に電話くれると思ってた。そうか、おにぎりか、、、。少し、好みが分かった。踏み越えて来い！と思っていたけど、本当に踏み越えて来た。さ〜て、こっからどうしようっかなあ〜。ワクワク〜。

小豆色（あずきいろ）の望

奈「何も食べなくても、胃に悪いからね。禁止されたものは？」

望「ラーメン、スパゲッティ、柑橘類、コーヒー、カレー、、、」

奈「次に来た時、ラーメン、作ってあげるわ（笑）。カンスイを使ってない麺で」

望「そんなのがあるのね」

奈「スープも、かつお節にしてあげるから問題ないはずよ。負けちゃダメよ？」

望「まさか、胃から出血してたなんて（涙）」

奈「我慢し過ぎだから、望はそうなるのよ？だから、ラーメン位は食べようね？（笑）」

望「柏木サンって、すごいわね。また、彼女の勘が当たったわ、、、」

奈「皆、自分の事で手が一杯なのにね。目配りが素敵ね。望もガンバレ」

望「私は、もうお仕舞いだと思うわ、、、」

奈「出血場所が悪かったら、血を吐いていたのよ？運は充分いいわよ」

望「子供を墮ろしたバチよ、、、」

奈「もっと前から胃を壊してたんだから関係ないわ。気弱になるのも分かるけど」

望「彼は、今頃平然と元の生活に戻っているんでしょうね」

奈「あっちにバチが当たってるかもよ？（笑）」

望「私に確認できないなら、当たっても意味ないわ」

奈「倉田サンの信頼は落としたと思うけど？」

望「間違いなくね」

奈「そうすると、周囲が見ている、何か笹木がやったんだって事が知れるわ」

望「そう？」

奈「きっと、敵が多い人だと思うしね。今回の人非人なやり口、彼らしいって事よ」

望「ええ、あれは、いつきの感情じゃなかったわ。ああいう人だから出来た事、、、」

奈「奥さんに話したのは、これ以上騒ぎを大きくされたくなかったからよね」

望「奥さんの事は信じているのね、、、」

奈「彼がエサ運んで来なかったら、彼女も食えないのよ？夫婦なんて、それだけよ」

望「でも、奈々子だって自分が結婚したら、世の夫婦よりましな夫婦になりたいでしょう？」

奈「まあね」

望「多分、皆そうよ。だけど、日常の毒にヤラれて落ちてくの、、、」

奈「毒？」

望「ええ。太陽に自然と当たっているように、暮らしているだけで毒が身体に入るの」

奈「毒で、子供の時の夢も忘れてく？」

望「ええ。正義より、保身の方が大事にもなるの」

奈「笹木サンって、学生時代は正統派ヒーローだったでしょうね、、、」

望「そうなの。常に人の上に立って来た習性がそのままよ」

奈「女の人を妊娠させて、彼の正義感はいずこなの？」

望「恐らく、本気で自分の子じゃないって思いたいんだと思う」

奈「都合のいい話ねえ、、、」

望「妄想に近いわ、、、。狂ってる、、、」

奈「少し眠って？私は、ちょっとその辺を掃除して、胃に優しいものを作るわね」

望「助かるわ。床を拭いたり、正直言って身体が無理だったの」

奈「麻美と交代で出来るだけ来るから、考え過ぎないでね。治りが悪くなるから」

望「眠るって、体力要るのね。まとまって眠れなくなったわ」

奈「眠れなきゃ死んじゃうわ。って事は、ちゃんと眠れてるって事よ。安心して」

望「レトルトだけど、カレー食べておいて良かったわ（笑）」

奈「????」

望「きつと禁止されると思って、食べおさめしておいたの（笑）」

奈「それでいいのよ。ストレスが一番よくないわ（笑）」

神山課長、どうしていらっしゃるだろう。もう、二度と会えないわ。とても顔向け出来ないもの、、、。いつ入社出来るようになるだろう。私のデスク、あるかな、、、。ホントに首になったりして、、、。胃カメラ、辛かったな。少なくとも、あと一回は検査されるわよね。考えただけで吐き気が増すわ、、、。外科も初めてだった。この頃、初めてが多いのは、そういう星回りなのかな。せめて、もっと早く効く薬って無いのかなあ。痛みは兎も角、吐き気が我慢しがたいわ。横になってるしか出来ない。何をしても気は紛れない。胃ごと捨てたい、、、。

*赤い色は、祈願の色。魔除け、厄除け。

お赤飯は、そういう事なのです。

鴉羽色の麻美その参

女「ここに座って」

麻「はい、、、。（あ！大物女優だ！ゲッ！睨んでる！？）」

メイク室って、こういう感じなのか～。ヘアメイクさんって器用だなあ。あっという間にナースになったよ。コスプレ気分だ。しかし、あの女優、どうして睨んだんだろう???お茶の間の好感度は高いけど、アテにならないものだなあ。感じ悪い女！けど、そういう事を口外する事も私達は禁止されてるんだよね？芸能事務所って堅いよね～。もっと、チャラチャラしたイメージだった。

男「ボクが合図したら、ここをまっすぐ歩いて来て。これ、持って」

現場って、な～んかピリピリしてるなあ。余計にドキドキする、、、。回りました～！はい！回った！テスト！はい！テスト！用意、、、スタート！し～ん、、、。さっきの人、さっきの人、、、。あ、来た！あれが合図だよね???足元がおぼつかない、、、。男優サンと擦れ違う。ポーカーフェイスだ、ガンバレ、自分。わわわ！カメラもスタッフもスゴい！セットの廊下は終わってる。どっちに歩けばいいんだ???え～い！適当に行け！カット！チェック入ります！チェック入ります！

男「戻って」

何度も繰り返す。それって全てNGだったってワケじゃないらしい。同じシーンを別のアングルから撮ったりしてる、、、。ワンシーンなのに大変だなあ。

男「皆さんは、以上です。お疲れ様でした」

女「ヘアピン、戻して下さい」

おお、ヘアピン1本も無駄にしないのか、、、。

藤「タレントは続いてる？（笑）」

麻「なんか、エキストラだよ、、、」

藤「不満なの？」

麻「待機時間ばかり長くて、、、」

藤「音楽でも聴いていれば？」

麻「工作中だからって、事務所から禁止されてるの」

藤「厳しいね！」

麻「この前なんか、始発で集合だったよ」

藤「で、待機？」

麻「そうなの、、、。終電なくなった時もあった」

藤「どうしたの!？」

麻「タクシー呼んでくれた。リハーサルの日だったから、翌日の本番の日にお釣り返した」

藤「いい事は？」

麻「緊張感かな。いいなと思っていた俳優サンが、ホントにオーラ素敵だったりさ」

藤「たとえば？」

麻「それは、言っちゃいけない事になってるから、、、」

藤「バレないでしょ？」

麻「私達同士は、結構色々教え合ってる（笑）。中には世間を騙してる俳優もいるから」

藤「疲れてる??？」

麻「5時前に二日続けて起きて、二日とも終電じゃね。けど、、、」

藤「もっと悪い事？」

麻「トイレを我慢させられたり、1分半、特大の笑顔をキープとか引き攣るよ？」

藤「大丈夫？」

麻「お互いの結束が固いから、タレント仲間で励ましあってるよ」

藤「ライバル意識ないの？」

麻「もっと上的人是知らないけど、目立ってなんぼの世界だから、実力には一目置くの」

藤「実力主義か、、、」

麻「運も大事。人間って、努力ばかりでも運だけでもやる気そそられないんだよね」

藤「麻美、最近深い事を言うようになったな」

麻「私を過小評価し過ぎてたって事じゃない?（笑）」

藤「会社にいた時は、仕事をこなしてただけだったのにね」

麻「いい意味で我が儘になった（笑）」

藤「身体にはホント、気をつけろよ？」

一番困るのは、スケジュールを事務所にほとんど押さえられているのに、前日になって収録がなくなったり連絡が来る時が多い事。予定がガッタガタだ。一回、オーディションを受けてみたいなあ～。野望、ちいせえ～。

小豆色の麻美？

麻「バカ野郎！！！！！」

藤「お前は黙って！」

麻「テラちゃんが、セックス依存症なわけない！（怒）」

藤「人の話を最後まで聞けないヤツは黙ってる！」

麻「テラちゃんに貰ったチョコレート、今すぐ返せ！（怒）」

望「自分で買って来たわけじゃないし、私は今どんな話でも聞いてみたいわ」

麻「フッチーだって、タバコ依存症じゃん！？（怒）」

藤「だから分かるんだよ。あっち行けよ！あ！痛っ！本気で殴るな！（怒）」

望「麻美、悪いけど、持って来てくれた林檎、剥いてくれる？」

ちっくしょお！突然なんなんだ！？テラちゃんを侮辱しやがって。それも、あんなに傷ついている時に。脳ミソに悪い菌でも入ったか、フッチー。えっと、、、林檎はウサギさんにしよう。ちょっとでも気持ちを明るくしてあげなきゃ。うおお～、怒りの余りに手が震えてる。アイツ、後で半殺しにしてやる。えっと～、半分は、サイコロにカットして、更に擦りおろしをかけようっと。皮は使おう。キレイだし、栄養アップだ。

望「確かに、気が付くと頭の中はその事ばかりで、するまでおさまらない」

藤「しても、すぐにもっと欲しくなる」

望「ええ。彼と相性がいいのかと思ってたわ」

藤「不倫だと思う分、脳からドーパミンだかなんだかが出てたんだよ」

望「アルファ波じゃない？癒されたし」

藤「いずれにせよ、脳内麻薬だよ」

望「冷たいなと恨んでいると、会った時にすっごく優しくて、、、」

藤「望が自分の価値に疑問を抱いていたから、何をやってもヤツはポイントをゲット」

望「DVにあってる女性と一緒にあったわね」

藤「妙な宗教にはまっちゃってる人とかね」

麻「はい、あ～んして」

藤「バカっぽいヤツがいると救われるな（笑）」

麻「ムキ～ッ！（怒）好きな人との場合と、どう区別すんのさ？」

藤「本当に愛していたら、ヤラなくても平気サ」

麻「オスが、そんなわけないじゃん」

藤「男を何だと思ってるんだらうね、、、」

望「甘くて美味しいわ。人が剥いてくれる林檎ってこんなに美味しかったっけ」

麻「テラちゃんは、いつもしてあげる側だからね。ホントは甘えたかったんだよね」

望「ええ、彼は男性的で、甘えてる錯覚に陥ってたわね」

藤「眠いんじゃない？」
麻「人に運転させといて寝るわけにもいかないじゃん」
藤「チョコレート、ありがとう」
麻「テラちゃんに頼まれたついで」
藤「でも、サンキュ！」
麻「安物だし」
藤「なんか、可愛くないな、、、」
麻「キスして」
藤「え??？」
麻「今すぐキスして」
藤「あ～っははははは！！！！（笑）」
麻「！？（怒）」
藤「ヒイ～、苦しい、助けて！（笑）」
麻「なによお！（怒）」
藤「なによは、オレの台詞でしょ？（笑）あはははは（笑）」
麻「ばかにしてる！（怒）」
藤「運転中だし（笑）」
麻「赤信号の時とか？」
藤「わはははは！進めは青だし！（笑）わはははは！（笑）」
麻「もういい！それに、自分でも何言ってるんだか分からない（笑）」
藤「だしょ？ん??？ぎゃはははは（笑）」
麻「や～い！でしょ、と、だろ？を噛んだ！ははははは（笑）」

フッチーのキスは、握手みたいに礼儀正しかった。全くいつもの笑顔で、おやすみと言った。女に恥をかかせない男だ。でも、私があんな事を口走ったのは、どうしてなのかなあ、、、。

小豆色の奈々子？

望「美味しいわ」

奈「胚芽米でコンソメ味のおかゆよ。カボチャとニンジンがキレイでしょ？」

望「最近ささいな事が幸せだわ。こんな状態だからかしらね」

奈「ドーパミン神経が正常に戻って来たからよ（笑）」

望「猛の言ってた、ドーパミンがどうとかって話？」

奈「ドーパミンで、幸せややる気を感じるのよ。ムリに出していると鈍感になっちゃう」

望「ムリして出してたかな？」

奈「彼とセックスする度に過剰に出ていたのよ。望のせいじゃないわ」

望「でも、誰でもそうはならないでしょ？」

奈「いけない事をしてるって気持ちが、快感を必要以上に増強するのよね」

望「不倫してる全員が依存症とは思われないけど、、、」

奈「彼、上手かったんでしょ？」

望「・・・玄人女性に仕込まれたって程に、、、」

奈「けど、もっとって思ったでしょ？エスカレートしてっただしょ？」

望「奈々子、意地悪ね、、、。見てみたいに、、、」

奈「なのに、欲求不満だったり、罪悪感があったり、変じゃない？」

望「彼が私だけのものじゃなかったせいじゃない？」

奈「最初の時に、神経を破壊する程のセックスをしちゃったからよ」

望「すごく良かったって事？」

奈「気持ちも身体も壊れたのよ。で、彼に突進して行った、、、」

望「身体より心が先だったけど？（怒）」

奈「はじめはね。けど、コントロールが利かないなんて、依存症でしょ？」

望「男の人に溺れるのって気持ちいいって奈々子は知らないのよ」

奈「依存症はドラッグと一緒にだから、具合が悪くて性欲どころじゃない今、縁を切ってね」

望「怒らないで欲しいんだけど、、、溺れてちゃダメ？彼以外の人とで、、、」

奈「神経が麻痺して不感症になるわ。それに、罪悪感以外に自己否定とかなかった？」

望「う～ん。自分って何やっても気を引けないんだなと思ってた」

奈「それって、ドーパミン神経をやられてたせいよ。元に戻るわ」

望「いつ？あんな仕打ちされたのに、まだどこかで彼を待ってるわ、、、」

奈「分からないけど、誰にでも起きる事だって気がするわ」

望「私って変態だったのかも、、、」

奈「恋は誰でもするし、そしたら世界が薔薇色に見えるでしょ？」

望「私は何がいけなかったのかしら、、、」

奈「事故よ。恋なんて冷めるけど、愛に移行するように人間はバランス取るんだと思う」

望「永遠の恋がいいわ、、、」

奈「私は、生物学的にそれはないと考えてるわ。P E Aとベータエンドルフィンの関係よ」
望「え？何の関係？」
奈「夢の無い話よ（苦笑）」
望「いいわ（苦笑）。それより、これ貰ってくれる？」
奈「灰皿？？？いいの？やけに素敵なのに」
望「持っていたくないから（苦笑）」
奈「フッチーにあげれば？」
望「もしかしたら、麻美と付き合う事になるかもしれないから、、、」
奈「ないわよ（笑）。友達は、友達のままよ（笑）」
望「気付かなかった私が鈍いけど、麻美って性格いいだけじゃなくてチャーミングだわ」
奈「あなたの彼氏を寝盗ったのよ!？」
望「私が邪魔してたのかも、、、」
奈「なんなの???依存症の後遺症???まあ、いいわ。和正くんが喜ぶ」
望「誰???」
奈「23歳の男友達。いや、女友達。いや、やっぱり男っぽいわね（笑）」
望「何言ってるのか分からないわ、、、けど、楽しそうね」
奈「私は、楽しくなくっちゃ生きていけないの」
望「ごめん、、、言ってる事よく分からないわ。それって選べないと思うけど、、、」
奈「楽しい人生？」
望「寿命の方も、、、」
奈「知ってるけど、どうしようもないわ。忘れて?（笑）」

自分は、今、世界で一番不幸だ。なのに、どうしてだろう。楽しいって言った奈々子が、とても不幸せに見えた、、、。

滅紫（めっし）の奈々子その壱

和「どう？どう？オレなりに頑張ったんだけど」

奈「美味しいよ。ん～、メルローじゃん。美味しいと思った。まあ、好みだけどね（笑）」

和「結構やるようになったでしょ？ワインは、奈々子サンのお陰で詳しくなった（笑）」

奈「高かったでしょ？悪かったわね。麻美だったら、1500円でゲットしてるけど（笑）」

和「どうやって!？」

奈「行きつけのフレンチレストランのママさんに可愛がられてるの」

和「横流し？」

奈「まあ、そうなるかな。従業員のマカナイも食べてるわ（笑）」

和「この世は、コネなんでしょ？ふん！ねえ、ねえ、この新曲聴いてよ！」

奈「ん？ちょっと！これ、大嫌いなグループって言ったじゃん！（怒）」

和「これはイイから聴いてよ！」

奈「・・・ああ、、、やっぱり、しつこく愛を語ってる、、、。この男気持ち悪い」

和「素敵じゃん!？（怒）」

奈「イチからジュウまでクドクドと、、、。女々しい歌！これかけてくれる？」

和「何コレ？吐き気がする！」

ロックで吐き気???アホじゃないの???今日の和正くんは変!元々、アップダウンが激しい人だけど。折角の大根の煮物も全部陽河くんに渡すって言い張るし、、、。まだ味が浸みてないから、今夜は食べられないって言ったせいかな。子供だよね～、、、。疲れる、、、。

奈「で？バレンタインはどうだった？」

和「どうって？店の女性スタッフから貰っただけだよ。毎年そんな感じ」

奈「何が不満なの？」

和「オレ達って、出会いのチャンスだけでも少ないって、いつも言ってるじゃん?（怒）」

奈「路線変更しちゃえば？」

和「じゃあ、自分もしなよ！（怒）」

奈「どうして私が！（怒）私は、グチグチ言っていないでしょ！それに、バイかもしれないじゃん！」

和「はい、はい！（怒）奈々子サンが、初めて泊まりに来た日の事ね?（怒）」

奈「アンタ、まだどっちか分からないじゃん！」

和「相手の子には悪かったけど、女の子で試してダメだったんだから、こっちだよ！」

奈「試した？まさか、普通の女の子に?（怒）」

和「試すしかなかったんだよ、、、」

奈「ちゃんと優しくしておいた?（怒）」

和「したよ?うんと優しくしたよ？」

奈「そうじゃねえよ！（怒）てめえが火をつけた女の身体だよ！（怒）」

和「優しくしてあげたよ、、、（涙）」

奈「ちげえよ！（怒）して、あげたかと聞いている！分かってない！その子、可哀想、、、」

和「ごめんなさい、、、。見ただけで、もうムリで、、、（涙）」

奈「女を傷つけるヤツ、男と違って上手くいかないと思う（怒）」

和「じゃあ、自分は？（怒）人を傷つけた事ないわけ？」

奈「女は、男を傷つけて構わないのよ」

誰か、いつか奈々子サンの鼻をへし折って欲しい。クチじゃ、オレは負けてばかり。あの自信はどっから来るんだろう。半分でも分けて欲しいよ。オレの陽河も盗って、、、。なんだよ、夜中の3時に電話くれたって、、、。オレも陽河の電話で起こされてみたい、、、。手話サークルの男女関係でモメてる相談？？？モテてる自慢じゃないの？頑張っても、頑張っても、オレの評価は上がらないみたいだ。男らしい？大人っぽい？頼りになる？冷静？優しい？頭がいい？センスがいい？我が儘じゃない？認めるけど、ノロケにしか聞こえない。疲れた、、、。だけど、このままじゃ悔しい、、、。

*紫草で紫紺にする時、低温で染めると紫、が、熱くすると青黒味を増してしまう、、、。

紅柄色・弁柄色（べにがらいろ・べんがらいろ）の麻美

やった！覆面モニターだ！と最初は思った。めっちゃんこ面白そうだと。フッチーも喜んで協力すると言ってくれた。ただ、チェック項目が100もあって、甘くないなと感じた。それに、予算に上限があって、足が出た分は自腹。そして、、、謝礼は、なんと、その食事代だけ、、、。これって、仕事と呼べないかも。入店時間も記入するし、滞留時間まで決められている。ぶっつけ本番な仕事なので、そういう意味でのドキドキはあった。フッチーも、これから犯罪でも犯すみたいに緊張してる、、、。

藤「ここじゃない？」

麻「そうだね」

藤「18時43分」

麻「エントランスの掃除の具合も忘れないで見て」

女「いらっしゃいませ～！お履物、こちらへお願いします」

麻「ありがとうございます」

藤「麻美が礼儀正しくなる必要はないんじゃない？（笑）」

麻「いや、、、これから私が意地悪な質問する相手かと思うと、、、」

席に案内される間も、ドキドキしっぱなし。おしぼりは、手渡し。よし、今の所、全て10点だ。メニューのチェックもあるので、しよっぱなから色々と頼んでみる。盛り付け、10点。どれも美味しい。お酒、10点。でも、コースターが野暮ったい。頭の中に、メモ、メモ。困る項目は、一番輝いていたスタッフと、そのワケと、もう少し頑張ってるってスタッフの名前とワケを書かなきゃいけない事だ。全員が素晴らしかったのって書けるといいけど、、、。

麻「忘れないうちに、トイレのチェック行って来る」

藤「しっかり！」

おお、綿棒まで置いてある。掃除も隅々までOK。グリーンも飾っている。10点。

藤「どうだった？」

麻「バッチリだった」

藤「良かった。けど、麻美、トイレの場所を説明させるのを忘れたから、オレ行ってやるよ」

麻「！危ないトコだった、、、。よろしく」

どの席も、半個室な感じ。広さは、、、まあ、こんなもんか。

麻「どうだった？」

藤「あの女の子、キビキビしてる。輝いてたスタッフに書いてあげなよ」
麻「ドリンクも必ず再度注文するしかないから、今頼んで、その子だったらネーム見る」
藤「押すよ？」
麻「何分以内に来るか計らなきゃ、、、。いいよ、呼んで」
女「お待たせしました」
麻「（3分以内だ）」
藤「キレがいい日本酒でお勧めはどれかな？」
麻「（この子、メニューがインプットされてるし、勧め方も上手い）」
藤「じゃあ、オレはソレを。麻美は？」
麻「黒糖梅酒って何かな??？」
藤「（あ、説明が上手いし、終始笑顔だ）」
麻「へえ～、じゃあ、私はソレ」
藤「ネーム見た？」
麻「そっちに目線送れないよ～（泣）」
藤「だと思った（笑）。豊田サンだったよ」
麻「フッチー、やるなあ～。来て貰って良かったよ～」
藤「もう一歩なスタッフはどうするの？」
麻「どんな料理ですかって聞いた時に、厨房まで聞きに行った子、、、」
藤「聞いて来たのに、説明がヘタで、暗かったよね」
麻「顔色も悪いんだよ。ネズミみたい顔だし、、、」
藤「顔もチェックするの!？」
麻「いや、顔は関係ないけど、デキル人間は顔に出ているからさ（笑）」
藤「言葉は選んであげなよ？」
麻「名前分かってないからなあ」
藤「佐々木だった（笑）」
麻「笹木!？最悪な名前だ、、、」
藤「けどさ、、、。なんか、食った気がしねえなあ（笑）」
麻「もう、1時間半経った？」
藤「経ったよ」
麻「じゃあ、跡形もなく食べて帰ろうよ。疲れちゃった、、、」
藤「同感だけど、帰りのチェック項目を忘れないで（笑）」
麻「うん。フッチー、ありがとね。うち、ぶっ散らかってるけど、お茶飲んでく？」
藤「そうしようかな、、、。なんか、ほっとしたい（笑）」

思わず誘ってしまったけれど、フッチーがうち来るのは初めてだ、、、。この男相手に、今更ドキドキでもないか、、、。

藤「女の部屋で、こんなに汚い部屋は初めてだ（笑）」

麻「だから先に言っておいたじゃん？（怒）」

藤「望は、よくこんなトコに何泊もしたな（笑）」

麻「この方が機能的なの！（怒）」

藤「けど、気のせいか、いい匂いがする、、、」

麻「ああ、フリーズアとヒヤシンスとスイートピーのせいかも」

藤「花、飾ってるのか、、、」

麻「会社辞めてからね」

藤「つくづく辞めて正解だったな」

麻「でも、覆面モニターはこれっきりにする、、、」

藤「手伝ってやるから、忘れない内にレポート仕上げてしまいな（笑）」

麻「鬼！」

*顔料の紅柄ですが、弁柄ともいう、、、。

ベンガラは、東インドの地名でポルトガル語。

そこで、良質の赤褐色の酸化第二鉄が産出される事から産地名が顔料名に、、、。

茶色に近いです。

千歳茶（せんさいちゃ）の望その壱

麻「なぜに鎌倉??？」

望「何か捨てるのは、ちょっと遠い方がいいけど、あんまり遠いと大変だから」

麻「私はいいけど、テラちゃんの体調がもう少し回復してからがよくない？」

望「うちにこもっていると、ろくな事を考えないし」

麻「そうだね。間際まで仕事が出来た位だし、寝てばかりも辛いしね」

望「でも、なんだか一人で外に出るのが怖くて。ごめんね、、、」

麻「謝る事ないよ。友達じゃん？途中で具合が悪くなったらいけないしさ」

望「私って、謝ってばかりだと思う？」

麻「？普通じゃん??？」

望「男の人には暗い印象になるかな？」

麻「??？感じいいと思うけど、、、。ああ、場合によっては重い（笑）」

望「直そうかな、、、」

麻「どうかなあ〜。ごめんとありがとうは、かなり大事な言葉だと思うけど、、、」

望「卑屈な人間だから言うような気がして、、、」

麻「笹木に何か言われたせいだったら、価値観おかしい男だから気にする事ないよ？」

調べた寺は、高台にあった。建物でいうところなら、踊り場にあたるところに小さいお地蔵様が沢山並んでおり、花やおモチャやお菓子が供えてあった。それぞれのお地蔵様が、ベレー（とは呼ばない）を被っていたり、エプロン（とも呼ばない）をしていて、一人（人なの??？）ずつ違う。すごい眺めだと感じたその時、突風が吹いた。風車が一斉に回った。

麻「テラちゃん！？どうした！？大丈夫！？」

風車は、乱れながら回る。耳障りな音を立てて。止まりそうで止まらない。

麻「めまい！？息が切れた！？戻る！？」

望「ちゃんと供養して貰わなきゃ、、、」

麻「日を改めようか！？立てる！？」

望「これは、赤ちゃんの怒りよ。登るわ、、、」

麻「どれ？（泣）赤ちゃんは、怒ってないよ？」

望「行く、、、」

望「付き合ってくれてありがとう」

麻「無事に済んで良かったね」

望「いいえ。あの住職、彼の名前をブントとかモントとか、むにゃむにゃ言ったわ、、、」

麻「・・・」

望「皆ちゃんと二人で来ていたわ、、、」

麻「・・・」

望「麻美、悪いけど、ちょっとここで待っててくれる？」

麻「！？どこ行くの！？」

望「ちょっとね、、、」

死に場所が見つかるかもしれない。道路から外れて、山に分け入った。落ち葉を踏みしめて、気持ちだけはグングン登った。実際は、勾配が急でノロノロとしか登れなかったけれど。頂上が見えないのが救いだ。いつまでも登って行けるから。登山だったら頂上を目指す。私は、何も無い所を目指す。ブラックホールでも開いてないかな。

男「おや？よくこの道を知ってましたね（笑）」

女「お先に～。お気をつけて～」

え？ここを行ったら、どこに出るの？あ、、、まっすぐ行くと下り坂だ、、、。道もある、、、。道が太くなる、、、。人家だ、、、。茶店？？？お土産物屋さんだ、、、。駅？？？ああ、、、。麻美から、沢山着信が来ていた。駅の名を告げた。板張りのベンチで麻美を待つ。自分は、なんてカッコ悪いんだろう。あの人達から見て、私は自殺を決意した人間にさえ見えなかったらしいし。麻美、怒ってるかな。二度としないですって言われたのにしたし、、、。置き去りって酷いし。

麻「寒くなかった？次の電車、きっとすぐ来るからね」

望「・・・」

麻美は、何も言わなかった。だけど、帰りの間中ずっと黙っていた。置き去りにしたのは、麻美に甘えていたからだ気付いた。こんなにまだ苦しいって分かって欲しかった。でも、黙っているのは、怒られるよりコワイ、、、。何を考えているのか分からないから、、、。麻美の無言、笹木夫婦からぶつけられた言葉以上だ、、、。今度は、麻美を失うのだろうか、、、。こわい、、、。ただ、こわい、、、。

*濃く暗い緑を茶がからせた、暗い緑褐色。

江戸時代、こういうオリーブ系の渋い中間色も、茶と呼ばれた。

奈「ばかね」

望「ごめんなさい、、、」

奈「そうじゃなくて。その罪悪感よ」

望「いいえ。何度も死のうだなんて、負け犬もいいところよ」

奈「死のうとしちゃいけないかな？」

望「生きたくても生きられない人だっているのに、、、」

奈「その人達の運命、望に責任はないわ」

望「でも、酷い負い目を感じるわ、、、」

奈「自殺はいけないって洗脳されてるのよ。悲しい事だけど、いけなくないわ」

望「発作的に死にたくなるのは、私が弱いからよ、、、。残された麻美は、、、（泣）」

奈「まず、何かを捨てようと思った望、偉かったわよ？」

望「私が、偉い!？」

奈「充分、自分と戦って、人生をリセットしようとしてるわ」

望「忘れたいし、許しを請いたいの」

奈「クリスチャンだっけ?（笑）クリスチャンだって、死にたい時は死にたいものよ」

望「うつ病かも、、、」

奈「そうだとしても、出かけられたのは偉い」

望「やっぱり、偉いって言うの??？」

奈「外が怖かったはずだわ。笹木達が闊歩する世界よ？」

望「ああ、外って、そういう意味だったかも、、、」

奈「自分が普通の状態じゃないと自覚して、同伴を頼んだのはいい判断よ」

望「麻美に潜在的に何か仕返ししたかったとか、、、。少なくとも当たったとか、、、」

奈「いつも清い望が、諸々と人間らしくなって来て良かったと思うわ」

望「私、そんなにダメだった？」

奈「変えられないものまで変えようとするところがあるわね。やけくそと一緒によ（笑）」

望「そうね、、、。内心、よくヒステリー起こしてるわね、、、」

奈「心が疲れてしまうわよ？」

望「今も疲れてるわ、、、」

奈「誰にも波があるわ。これからも死にたくなっても自然だわ」

望「その時は、本気で死ぬ気になっちゃうの、、、」

奈「どこかでセーブしてるから、けっして死なないし、乗り越えるわ」

望「そうやって強くなって行くのね、、、」

奈「強くなる必要もないわ。それも、洗脳よ」

望「？」

奈「何かを乗り越えた時、人の優しさを知って、自分も優しくなるとか考えなくていいのよ」

望「乗り越える作業に報いはないの？」

奈「人間に幅が出来るわ。でも、幅は、魅力的って事で、善である必要はないわ」

望「もっといけない人間になる可能性もあるって事？」

奈「ワルって惹かれない？（笑）」

望「惹かれる（笑）」

奈「色々な人間がいるから面白いのよ」

望「ごめんこうむりたい人間もいるわ（笑）」

奈「自分を律し過ぎると味気ない人間になるわ」

望「そうね。私より、奈々子の方が実際にモテる。嫌なヤツなのに（笑）」

奈「その調子よ（笑）。済んだ事は変えられないの。麻美には、私が電話しておくわ」

望「ありがとう、奈々子」

奈「電話くれるようにも言っておくから、クヨクヨしないで胃を治してね」

夜なのに、月が明るくて雲が白くハッキリ見える。空も青い。夜でも、晴れは晴れ。

滅紫の奈々子その貳の前半

奈「今ねえ、和正くんちなの。じゃが芋と絹さやの煮物作って来たけど、来られる？」

陽「友達に来てるんで」

奈「残念だわ、、、」

和「煮物だけでも届けば？」

奈「煮物、食べるなら、、、」

陽「喜んで」

奈「じゃあ、こっちから歩いてくから、そっちから歩いて来て。友達に悪い？」

陽「子供じゃないから（笑）」

奈「そうよね。友達も食べたいかもしれないし」

陽「それじゃ、セブン辺りで」

奈「了解！」

イソイソと歩いたせいか、コンビニまではアツという間だった。そして、タイミング丁度に彼が来た。悠長に歩いて来たけど、なんてったって歩幅が広い。

奈「お疲れ～。缶チューハイ買って～」

陽「オレが？金ないのに？（笑）」

奈「いいじゃん、それくらい。入ろう、入ろう」

陽「どれがいいの？」

奈「ん～、わかんない（笑）。どれがいいと思う？」

陽「マスカットは？」

奈「好き～」

陽「コレでいい？」

奈「それにする～」

この横手で、オレ達、仕事終わった後でダベッてるんだけどって彼が言った所は、薄暗くて最高のロケーションだった。彼が適当に座ったので、ぴったりくっついて座った。

陽「え！？そうなの！？」

奈「なんで？」

陽「普通、そうかなあと思って」

奈「別にいいじゃん」

陽「いいけどね、、、。うわっ！何するの！？」

奈「膝、開いてて寒くないかなあと思って（笑）」

陽「わっ！ちょっと、ホントによして」

奈「皆、ここをこうやって触ると嫌がるよね（笑）」

陽「冗談抜きでよして？」

奈「つままないの～。これ、開けて」

陽「ん、」

奈「ありがとう。男の人は、力があっていいわね～」

陽「女性でも開けられるように作ってない??？」

奈「男の人がそばにいてくれたら、頼んだ方が早いわ」

陽「ふ～ん、まあ、自由だけど」

奈「陽河くんって、本当に理解あるよね～」

店員が、何かの用で出て来ると、自然とどちらも黙り込んだ。この寒いのに、変なカップルって映っているかも。暗いから、私の歳までは判別できまい。他愛無いおしゃべりだけど楽しかった。ちっとも寒くなんて無い。

奈「あ、そうだ。コレ、美術館の招待券。一緒に行こうよ」

陽「何の展示？」

奈「調べておく。コレは陽河くんが持ってた」

遅い、、、。気に食わない、、、。あの二人、今日はどんな話をしてるんだろう。オレだって陽河に負けないのに。悪い気を飛ばして、邪魔してやる！よ～し！集中！！！！

滅紫の奈々子その弐の後半

奈「たっだいま～」

和「遅かったね」

奈「ダベッてたから（笑）」

和「どこで？」

奈「コンビニの外（笑）」

和「バカじゃん？」

奈「若者は寒くない（笑）。くっついて座ってたし（笑）」

和「奈々子サンは、もう若くないでしょ？それに、オレだって腕枕してあげてるよ？」

奈「なんか、怒ってる？」

和「別に？」

奈「煮物、全部持ってっていいって自分が言ったくせに」

和「食べ物くらいで怒らないよ（怒）」

奈「でも、怒ってるじゃん？最近おかしいよ？（怒）」

和「オレを、陽河に会うダシにしてない？（怒）」

奈「そんなつもりないけど？（怒）」

和「オレ、ずっと傷ついてるんだけど？（怒）」

奈「勝手に僻んで意地悪言うなんて最低だけど？（怒）」

和「なるほどねえ～。そうかもね。オレが傷ついても、二人とも痛くないしね」

奈「イジケてるの？だったら、なるほどって言うなよな！（怒）いつもそうじゃん？」

和「なんの事？」

奈「前から言おうと思ってたけど、和正くんって、分からない時になるほどって言う」

和「低脳扱い？（怒）」

奈「なるほどねって言うから理解したんだと思っていると同じ事を繰り返す」

和「奈々子サンは独りよがりで、話が見えない時があるんだよ」

奈「どういう事？って聞けば済むじゃん？どこで分からなくなっただか、こっちは見えない」

和「分かった。もう、なるほどって言わないよ。ごめんね、、、」

奈「この際だから言うけど、エロい話も止めて欲しい」

和「誰かに聞いて欲しいと思っちゃいけないの？」

奈「私が、生理的にどんなに堪えていたと思うの？」

和「そっちこそ、早くそう言えば良かったじゃん！（怒）」

奈「逆ギレすんなよな！（怒）」

和「オレには、話せる相手は奈々子サンだけって知ってて酷くない？（怒）」

奈「それに」

和「まだあんの？（怒）何でも言いなよ（怒）」

奈「なんで、プチ整形なんかしたのよ！？」

和「鼻にコンプレックスあるって言ってたじゃん！（怒）」

奈「結果どう？またやるって言ってるでしょ？整形は繰り返すのよ」

和「オレの自由でしょ？（怒）」

奈「余計に鼻を意識するようになってるじゃん！？その時こそ相談してくれていれば、、、」

和「どうして、いつもそうやって上から目線なの？（怒）感じ悪い！」

奈「！？どんだけ毎日メールやら電話やらに付き合ってたと思ってるの！？」

和「迷惑だったってワケ？」

奈「本数が多い！」

和「ここまで冷たい女とは知らなかった。最低は、そっち！（怒）」

奈「私がサイテーですって！？（怒）君との友情もこれまでだね！（怒）」

和「ありがとバイバイさよなら！！（怒）」

奈「！！！？（怒）」

和「帰るの？」

奈「・・・」

血圧が沸点に達した。上気した頬に風が突き刺さる。もう嫌だ、あんな男。オレの事はなかなか落とせないよ？勘違いにも程がある。落としてくれる相手もないのに。ああ、さっぱりした！ややこしい男と縁が切れて。

奈「陽河くん？」

陽「はい」

奈「和正くんとケンカ別れした」

陽「どうして？」

奈「あの人、喜怒哀楽が激しくて疲れる」

陽「そう、、、。自分で決めたならいいんじゃない？」

奈「なんか、素っ気無いね、、、」

陽「いつもと変わらないけど？」

奈「ごめんね。変な話で。おやすみ」

陽「おやすみなさい」

なんだろう、この物足りなさ。いつもと変わらないと言えば、変わらないけど。フラストレーションが溜まる、、、。こういう時、私は必ず何か見落としている、、、。今度は何???

千歳茶の望その参？

藤「で？麻美は、なぜに河口湖？（笑）」

麻「同じ友達に二回死なれてみなよ！？富士山のご利益が必須になるって！（怒）」

藤「死んでねえし（笑）。一回しか死ねねえし（笑）。別にケンカじゃないんだろ？」

麻「奈々子に言われて電話はしたし、テラちゃんは反省してた」

藤「じゃあ、なんでそんなに機嫌悪いの？」

麻「泣いている子をいびってもしょうがないから我慢してるけど、腹立って当然でしょ？」

藤「人騒がせだよ（笑）」

麻「私はいいけど、きっとまたやると思うからエネルギー補給に行くんじゃない！」

藤「え？？？麻美的にはいいの？？？またやるかもなの？？？」

麻「テラちゃんは、笹木達二人から公衆トイレみたいな女だと言われたも同然だって」

藤「公衆トイレ？」

麻「不特定な人が、排泄に使うでしょ？」

藤「そんな酷い例えは聞いた事ない、、、。望は、そこまで落ち込んでいるのか、、、」

麻「それに、子供を墮ろすって、女にとってどんな事か分かるからさ、、、」

藤「・・・麻美、お前まさか、、、」

麻「違う、違う！大学の時の友達だよ！」

藤「結構多い事なのか？」

麻「フッチーが想像しているよりはずっと多いよ」

藤「言い切るねえ～（笑）。その人達、結婚する時、男に話すのかな？」

麻「言わないでしょ！？」

藤「男としては、複雑だな、、、。もう大丈夫だ、オレが付いてるって言ってやりたい気もするし」

麻「し？」

藤「他の男の子供を妊娠しただけでビミョウなのに、中絶って、、、」

麻「じゃあ、全員がシングルマザーになった方がいい？」

藤「パパの事を聞かれた時に、ホントの事が言えて、それが子供にとっても嬉しい場合かなあ」

麻「テラちゃんが産むと言い張ったら、収集つかない事になってた」

藤「同感、、、。だから、望はそこまで自分を突き落とさなくともと思うけどね、、、」

麻「テラちゃんは、あんまり想像力ないからね」

藤「????」

麻「あの妊娠は、たまたまなんかじゃないよ」

藤「ヤツた結果、そりゃたまたまじゃないさ（笑）」

麻「ここにも想像力が無い人がいるよ（笑）」

藤「まあ、無い方だな（笑）。で？」

麻「あれは、そういう巡り合わせだったから、赤ちゃんは喜んで身を呈したんだよ」

藤「オレが背中押したんじゃないの？真面目な話」

麻「気にしてたの！！？ばかだなあ、、、」

藤「オレが幸せにしてやれなかった女の話、続けてよ」

麻「赤ちゃんは、どっちに転んでもママを大好きだから、水子供養も必要なかったんだよね」

藤「パパは？」

麻「存在まだ薄いんで（笑）」

藤「ははは。んで？」

麻「今もテラちゃんの周りで天使になって飛んでいて、ちっちゃな幸せを運んでるよ」

藤「天使が付いているのに自殺しちゃうか〜？」

麻「テラちゃんが気付いてないし、そもそもがちっちゃ〜な幸せだからね」

藤「麻美の感触として、またやるっていうんだな？」

麻「会社に復帰してからが危ない」

藤「そうなのか？」

麻「厳しい会社だから、左遷されるかもしれないから」

藤「ああ、そうだな。病気は誰だってなるよと言ってやりたいけど、健康管理出来ないって事
でな」

麻「既に、笹木の件だって人事の耳に入ってると思う」

藤「間違いないよ、、、。また異動か、、、。確かに耐える体力気力ないかもな、、、」

麻「うちらは見守るしかないよ。テラちゃんの人生だから」

藤「オレのせいで笹木なんかとヤバい橋を渡ったんじゃないかな、、、」

麻「優しいのはいいけど、自意識過剰！（笑）あ！トンボ玉体験だって！寄ろうよ！」

二人とも不器用だと判明した（笑）。ガラスを溶かすって難しいな。フッチーは、誰かにあげるつもりだったのか、花柄にしようとしてあえなく失敗。色も黄緑と透明の二色で爽やかさを狙ったはずが、地味色に仕上がった。私のは、デコジャレなハート柄が、逆にマーブル模様に見えてソコソコ。配色は先生にホメられた。ピンクっぽい紫、空色、山吹色。ペンダントにして貰った。早速してみたら、ニットワンピース（オフホワイト）の胸をコロコロした。フジヤマは、デカかった。名残惜しくて、帰りの車の中でも何度も振り返った。フジヤマ、懐深い山、、、。

和正くん、しつっこいなあ～。仲直りだって？ムリ！っと。甘えてばかりだったから、これからはオレが奈々子さんを甘えさせてあげる？要らない、っと。え？？？きゃあ～～～！！！何これ！？思わずケイタイを放り投げてしまった、、、。怖い、怖い（泣）。

奈「ひ、陽河くん、、、（泣）」

陽「どうしたんです！！！」

奈「和正くんから、怖いメールが来た（泣）」

陽「どんな！？」

奈「初めてくれたメールに添付されてたのと同じ花の画像だけ送って来た、、、（泣）」

陽「どうして、、、！」

奈「わかんない（泣）。仲直りを拒んでたら、来た（泣）」

陽「大丈夫。メールに取って食われたりしないから。着信拒否設定して。画像も削除して」

奈「触るの怖い（泣）」

陽「もう、嫌なんでしょう？」

奈「彼、私に執着してるんだと思う。拒否したら何するか、、、（泣）」

陽「男は凹み易い所があるから、エラーで返ってくれば諦めると思う」

奈「・・・彼は、、、男ではないトコがあるから、、、（泣）」

陽「????」

奈「彼、ゲイだと言ってる、、、」

陽「！？えっと、、、じゃあ、尚更、もう大丈夫」

奈「けど、、、一緒に寝てると、ポジション変えるから、、、（泣）」

陽「ポジション変える????」

奈「そう、ポジション（号泣）」

陽「!!!!？二度と泊まりに行かないで!!!!」

奈「うん（泣）。同じサロンで、陽河くん働きにくくなっちゃわない？（泣）」

陽「仕事と割り切りますから平気です」

奈「ごめんね（泣）。いつもありがとう（泣）」

心拍数が平常になって来ると、陽河くんには和正くんがゲイ（か、バイ）だと言ってしまった事が悔やまれた。そういう目で見られる事を一般男子はヒドク嫌うから、、、。妻が不妊治療してて、ご主人も連れて来てと言われ、何も疑わず行ったダンナが、いきなりお尻に指か何か入れられたってだけで激怒して離婚した話もあった。けど、後の祭りだ。

奈「陽河くん？一人？」

陽「友達と自由が丘（笑）」

奈「なんもないじゃん（笑）」

陽「そう言ったんだけど、田舎者だから、行ってみたって（笑）」

奈「美術館、いつ行く？あれっきりじゃないの～」

陽「なかなか時間作れなくて、、、」

奈「二人では出かける気にならないって事？」

陽「・・・」

奈「もしかして、和正クンの件と関係ある？」

陽「全くないよ（怒）」

奈「何???何を怒っているの???」

陽「オレは、頼れる男なんかじゃないから！歳だって随分離れているし（怒）」

奈「歳???」

陽「オレは、思われているような人間にはなれないから（怒）」

奈「???」

陽「じゃあ、友達を待たせているんで、、、」

奈「あ、ごめんなさい、、、」

切れた電話は、二度と彼と繋がる事はなかった。

滅紫の奈々子その参エピローグ

藤「話がある???オレ、シメられるの? (笑)」

奈「相談したい事がある、のマチガイ。ゴメン、、、」

藤「オレ、最近やけにモテてるけど、あんまり嬉しくないのは何故だ? (笑)」

奈「ああ、、、。私まで厄介な事をね、、、」

藤「分かってるじゃん (笑)。3人とも、安泰を踏み外す感じじゃないと思ってた (笑)」

奈「結婚してないだけで、充分ちよっとって感じじゃなかったの? (笑)」

藤「オレとしては、他の女子よりは好ましい (笑)」

奈「で? 迷惑なの? だったら、無理にとは言わないわ。そんな人が役に立つと思わないから」

藤「頼み事しながらも強気だね (笑)。損な性格 (笑)」

奈「もういいわ。今、忍耐ののに字も無い時なの」

藤「梅が綺麗な所に連れてってやるよ。機嫌直せ (笑)」

本当に、綺麗だった。紅梅、白梅、混じったやつ。いい香り。吸い寄せられるように顔を近づけて深呼吸した。

藤「ちょっとした植物療法だよ (笑)。あのカフェに入るよ。軽く食べよう」

奈「穴場を知ってるのね、、、。ここからも梅が良く見えるわ、、、」

藤「桜もいいけど、梅もいいよね」

奈「昔は、花と言ったら梅の事だったのよ。それに、私は桜は好きじゃない」

藤「どうして?」

奈「埃っぽい色をしているわ (笑)」

藤「う〜ん、、、。言われてみれば、、、。でも、余り人と違う事をクチにしない方がいいよ (笑)」

奈「へたな人と同類と思われて接触されても疲れちゃうわ」

藤「その正直さが命取りなのさ (笑)。そのせいで何かあったんじゃないの? (笑)」

手際よく何があったか話したつもりだけど、理解したかな。私を見つめて顔色ひとつ変えない。コーヒー、冷めた。えっ? お代わりを頼んだ??? 飲み残してるのに? が、フッチーの笑みにつられるように、店の女の人は笑顔で受けた。私にも微笑んだ? ヘビーな話のはずなのに?

藤「和正くんって子の件と、陽河くんって子の件は、一緒くたにしない方がいいね」

奈「でも、、、」

藤「そこで混乱が起きてるんだよ」

奈「う、うん、、、」

藤「和正くんとは、長続きしなかったと思う」

奈「どうしてそう思う？」

藤「感受性は鋭いけど、知的じゃないから釣り合わない」

奈「感受性豊かな人って宝だわ」

藤「知的じゃないから、上手く表現出来なくて、いつも苛々してなかった？」

奈「してたけど、、、それって知性と関係あるの？」

藤「その点に於いて、彼のコンプレックスを刺激しなきゃ良かったけどね」

奈「そんな事してないわ!？」

藤「こっち側には分からないものなんだよ。彼らの根深いコンプレックスは」

奈「陽河くんは賢かったわ!」

藤「慌てないで。彼らってのは自分よりぐっと知的じゃない人達全員の事」

奈「陽河くんとは、何がいけなかったんだろう、、、」

藤「慌てないで（笑）。和正くんって、センス余り良くなかったんじゃない？」

奈「どうして分かるの!? そうよ、オシャレな割りにハズしてた、、、」

藤「彼、豊かなんだろうけど混沌としてる人だろうから」

奈「ああ、、、言動もセンスも支離滅裂だったわ」

藤「ストレートじゃない人間に偏見を持たなかったのは感心する。オレはダメかも、だから」

奈「私は、年齢や国籍や性別は気にしないわ」

藤「だから、彼は嬉しかったし、負けず嫌いだから頑張っちゃったんだよ」

奈「彼の方は、手放しでは楽しんでなかったの？」

藤「そういう事。罪な女をやってたんだよ（笑）」

奈「ずっと傷ついてたって本当だったのね、、、」

藤「しょうがないよ。ホレた者の負けなんだから（笑）。陽河くんって子もね（笑）」

奈「私、彼に本気だったの？」

藤「知らない（笑）。が、向こうは圈内だったんだね」

奈「まさか!? 陽河くんが、私にホレて負けたって!？」

藤「どうやらね（笑）。追い詰めるような事を言ったから爆発しちゃった、、、」

奈「追い詰めた? また会いたかっただけなのに、、、」

藤「給料も安いだろうし、こっちは適齢期だし（笑）、ハードルがね〜（笑）」

奈「そんな事、気にしてないのに!」

藤「ちょっとはサ〜、男のメンツってものを考えてあげなよ、、、」

奈「こっちも終わる運命だったのね？」

藤「最初から無茶だったんだよ（笑）。本気にさせて、、、実に罪多き女だね（笑）」

奈「どうしたらいい?（泣）」

藤「二人を忘れて、男をモテ遊ぶのもやめて、、、（笑）」

奈「何よ! その言い方!（怒）」

藤「どっかで楽しんでなかったとは言わせないぜ？」

フッチーを、ただのいい人だと思ってた私は、なんてバカだったんだろう、、、。結構コワイ人だ、、、。あの二人が頼りにしているから、私も初めて相談事してみたけれど、、、。男の気持ち、、、考えた事なかった、、、。こんな私を気に入らなかったらアンタが去れば？みたいな感じでここまで来てしまった。子供にも劣るわね、、、。

藤「ほら、昭和の味のナポリタン（笑）。食わなきゃ元気出ないゾ！」

奈「フッチー、、、私の事、嫌な女だと思う？」

藤「オレだけじゃないと思うけど（笑）、そこがいいんだとも思う（笑）」

奈「いいの??？」

藤「簡単な女より血が騒ぐ（笑）」

奈「ば〜か！（笑）」

藤「素直な性格だと思うよ。皆、本心では憧れている生き方だと思う」

そんな事ないと思うけど、、、でも、ありがとう、、、。

来た！！オーディションだ！！場所は、新橋の制作会社。ゴールデンタイムの再現VTR。知らないコメンテーターの役だなあ。まあ、いっか。ワクワクする。オーディションってどんななんだろう。アガっちゃいそう。いや、いや、そんな事を言ってる場合じゃない。好感度高そうな服で行こう。ピンクがかったベージュのちょい膝上のギャザースカートと、、、ラベンダー色ニットのアンサンブルだな。靴は、、、万が一の遅刻時に新橋を走り抜ける事を考えてスニーカーにして、あっちで履き替えよう。明日の今日連絡が来るなんて、毎度ながら、もっと早く連絡来ないものかなあ。しかも、もう夜じゃんか。やべえ、眠れないかも、、、。

ん？朝か？いい度胸してるな、自分。ぐっすり眠った。手間隙かけて身仕度をと、、、。ブラウンのカラコンに合わせて、ピンクブラウンのマスカラだ。目立ってやる。なんか、モッサリしてるなあ、、、。髪は、アップなのか？ダウンなのか？あ！時間、時間！

新橋って、こんなに信号多かったっけ、、、。余裕をみて出て来たけど、気が気じゃないよ。いつも、遅刻は厳しく注意されていて慣れたはずなのに、やっぱり緊張の度合いが違うのかな。あ、ここ？良かった～。まだ集合まで40分ある。一応、事務所から集合時間の30分前には現場に着いているようにって言われているからね。えっと、、、会釈しておこう。制作会社の社員かもしれない。あ、すみません、4Fです、、、。ダメじゃん、自分。人に押させて。しかも、この女性も4Fで降りたよ！じゃあ、もう、この人に聞こう。え？番組名？わ！ド忘れした！中途半端な番組名しか言えなかったけど、にこやかにどうぞって言ってくれた。幸先いいぞ。え？会場の準備がまだ？えっと、、、スマイル、スマイル。早く来てしまってすみません、つつい気合い入ってしまって、、、。何？笑われた？本気笑いだったよね？？やる気を買ってくれないのか？？あ、マネージャーに連絡メール！無事に現場到着しました、一番乗りみたいです、広野っと。落ち着いてるように見せよう。よし、読書だ。あ、社員、、、関係ある人か分からないけど笑顔しておこう。制作会社って活気があるなあ～。あ、今の内にトイレ行っておこう。すみませ～ん、、、あの、トイレは？？？うう、この女性も感じいい。いっそ、この会社に就職したい。やっと部屋に通された。が、皆遅いなあ。あ、資料だ。どれどれ、私は？ええっ？ブスじゃん！？何この引き攣り笑い、、、。マネージャー、こんな資料を出していたのか、、、。今日は、5人の戦いらしい。あ、おはようございます！対戦相手1号。えっ！！！！？集合時間が違う！！！！？マネージャーのヤツ！！！！15分早く言いやがった！！私を信用してないんだな～。

優しいようなディレクターさんだ。宜しく願いしま～す！コメンテーター同士が、討論している内にケンカになるって設定ねえ、、、。私から！？よし、かますぜ！えっ？もっと怒って？おしっ！相手役のスタッフさんを睨んでやる。しかも、言った後でソッポ向いてやる。え？リアクションいって？嬉しい～。けど、3号って、、、。ホントの役者サン？？？迫力が違うよ、

、、。あ、噛んだ、わはは、あ、すみません、、。え？最後に、喜怒哀楽の顔をくれ？？
むむ、こんなかな？？いや、こんなかな？？

お疲れ様でした～！アレ？聞こえなかったのかな？？？2号が言ったら3号は振り向いた。すごく上手かったですね！ん？また無視した？？？2号がホメたら薄ら笑いを浮かべた。2号は愛想がいい。あのコメントーターに似ているし、きっと貴女に決定よ！あ、3号、嬉しそうな顔になった、、。ホント、ホント、そのメガネも彼女そっくり！コレ、いつもと一緒に、偶然よ！え？？？怒ってる？？？おかしいなあ～、私何かしたかなあ～。喫茶店からマネージャーに無事終了と連絡。リアクションは誉められましたが、ソックリさんがいたので、その方に決まってしまうかもしれませんと。

ところで、私が大事に抱えてたコレって何だっけ？？？パンプス！！！！？見るまでもない。私ってば、ずっとスニーカーを履いていた、、。

*一般的に珊瑚色は少し黄味のある桃色。

しかし、珊瑚には、白、桃色、赤がある。

赤い物ほどいい物とされるようで、なかなか真っ赤な珊瑚は買えないです、、。

二藍（ふたあい）の望

女「遊撃隊へようこそ～!!!」

望「有益体??？」

中「遊撃隊です（笑）。彼女達、自分達をそう呼んで楽しんでいます（笑）」

確かに、幾らカラオケでの二次会と言ってもはしゃぎっぷりがハンパじゃない。まあ、全員まだ23歳程度ってのもあるけれど。いいなあ。私もあんな時があったろうか。なかった気がするけど、先輩社員からはああ見えていたかもしれない。

杉山部長は、今回の異動も上手い事言っていた。システム部サポート課には、入社1年目の女子しかおらず、課長としては最若手の中山課長が少し手こずっているから助けてやって欲しい。肩書きは、課長代理。何よりも、中山課長たっの希望だ、、、。中山課長は、ズタボロの私なんかを拾ってくれるだけあって、とても優しい方だ。奈々子が、有給消化で早くも会社を辞めたので、自分も辞めようかと真剣に悩んだ。彼との噂も怖かったけれど、身体に不安もあったし、キャリアがストップしたと思ったから。男子に混じって昇進だの何だの願っていたんだと思うと、そんな自分に驚いたけど。奈々子は、どんなコネか、T大学の事務のバイトを始めると言っていた。一般事務では、奈々子が勿体無いような、T大なんてすごいような、、、。私は、ここを辞めたら、どこにも行くアテが無い、、、。麻美みたいに、貯金を崩す生活も恐ろしくて出来ない。

柏「どう？若い子達（笑）」

望「おしゃべりしてばかりです、、、。知ってはいましたけど、、、」

柏「望サンは、お局の貫禄でも付けた方がいいわ（笑）」

望「あ！そう言えば、彼女達、ニックネームで呼び合ってる、私も、、、」

柏「ニックネームを付けられたの!？」

望「いえ、望サン、です（笑）。彼女達に耳を貸して貰う為に、チャン付けでやってます」

柏「会社は遊びに来る所じゃないのにね、、、。望サン、も違うと思うし、、、」

望「10人もいると、中山課長サンが束ねられなくても仕方ないって感じです」

柏「まあ、社外の仕事を任せられない子達だから、、、」

望「上手く言えないんですけど、どうして分からないのかが分からないです」

柏「あなたは、デキル人間だからしょうがないわね、、、」

望「私こそ、落ちこぼれですよ、、、」

柏「いいえ。色んな才能があって羨ましいわ、、、」

望「中山課長サンのお力になれるように頑張りますけど、、、」

柏「けど?」

望「ここ、分からないってワラワラと囲まれて、、、」

柏「まさか、全部あなたがやるハメに!？」

望「はい、、、」

柏「あの子達、給料泥棒ねえ、、、」

望「お昼誘って下さってありがとうございました。わざわざ、、、嬉しかったです」

柏「誰でも、ツイテない時ってあるわ。身体だけは無理しないでね」

柏木サンは、小さい声で、あんな事はもう嫌よと言った。あんな事、、、。急性胃炎の事だろうけれど、ついつい深読みしてしまう。あんな修羅場が自分に起きるなんてね。よりもよって、この私が自殺未遂もね、、、。まだ、危ないと分かっている。電車が入って来ると、ふわ〜っと飛び込みたくなる。

女「敵襲〜!!! (笑)」

よその課の人が来る度に、イチイチ元気ね、、、。それにしても、いつまでも戻って来ない子達は、一体どこに行ったんだろう。余りにも遅い。流石に探しに行くしかないわね。保育士さんみたいで嫌だけど、、、。

望「ヒナ!? どうしたの!? 大丈夫!？」

女「望サン、、、 (涙)。ヒナの彼氏が、二股だったって分かったんです〜 (涙)」

女「男って、年上の女に弱いよね (怒)」

望「・・・二人は、仕事に戻って?」

女「友達がこんなに泣いているのにムリです (怒)」

望「・・・私を怒らせたい? (怒)」

3人共、親にも叱られた事が無いんだろうか。私、どんな声を出した??? ヒナまで泣き止んで、揃って青い顔してトイレから出て行った。4月からは女の子達に、オンとオフをわきまえさせよう。嫌われても平気。とっくに失うものは無いんだから。

遊撃隊は、残業はしない。その日は全員、中山課長にしか挨拶しないで帰って行った、、、。課長は、もの問いたげにこちらを見ていた、、、。

* 藍に紅花の赤が交染されて、鈍い青味の紫色になる。

紅花を、古くは紅藍 (くれない) と呼んだ。

この紅藍と藍で染めるので、二藍という。

洗朱（あらいしゅ）の奈々子

奈「まあ、大変だろうとは想像してたけど、自分がそこの課長代理は嫌ね（笑）」

望「3人寄れば文殊の知恵って言うじゃない？でも、おバカちゃんが増えてもかしらね」

奈「キツイ事を言うようになったじゃない（笑）」

望「死んじゃう手前まで行ったからかしら（笑）」

奈「二股された子には、共感しないの？」

望「自分もそうだったけど、される側にも問題あると思うから」

奈「益々な事を言うわね（笑）。話くらい聞いてあげるべきだったと思うけどな」

望「勤務中なのよ！？」

奈「業後でも良かったじゃない？」

望「次の恋でやり直せばいいじゃない？若いんだし」

奈「その人その人、今が若い歳の歳だのって、感覚として分からないものじゃない？」

望「ん～、そうね。人の歳は分かるけど、自分の事はね、、、」

奈「誰にだって、今の恋がベストの恋だわ」

望「ええ、そうね。彼女達、私と距離を置くようになって、余計やりにくいわ」

奈「女が相手の場合は、とりあえず、そうね、分かるわって言わなきゃ（笑）」

望「4月からは、3ヶ月、課長と二人だから構わないわ」

奈「同じ失敗しないでね。7月には、もっと子供な子達に来るんだから」

望「仕事場にプライベートを持ち込むなんて、今の子達ってダメね」

奈「自分はケジメつけてたつもりだろうけど、社内恋愛もしてたクセに（笑）」

望「不倫相手の奥さんに呼び出されたしね（笑）」

奈「それは、事故だからいいのよ。思い出してもいい事ないわよ？」

望「実はね、身体壊したから流石に会社辞めていいよねって父に言ったのよ」

奈「へえ～、、、子供なのは自分じゃない？（笑）」

望「全くだわ（笑）。で、父が、会社で壊した身体は、会社の保険で治して貰えて言った」

奈「私も、辞めたら損だったと思うわ。お金の事じゃないけど、、、」

望「そうなの。おめおめと辞めるような人間、よそでも使い物にならないって」

奈「お父さん、いい事言うじゃないの」

望「誰より心配していたのは、父だったはずなんだけどね」

奈「本当に優しい人って、厳しい事を言ってくれるのよ」

望「奈々子もそうよ（笑）。カチンと来るけど、後々まで見守ってくれてるわ」

奈「皆に幸せになって欲しいけど、幸せって人それぞれだから難しい（笑）」

望「T大ってどんな感じ？」

奈「春休みだから暇ね。けど、他と変わらないと思うわ」

望「同僚や上司はどう？」

奈「のんびりしてて、、、ダサいわ（笑）」

望「キリッとした男の人とかいないわけ??？」

奈「毎日同じ毛玉がついたカーディガン羽織ってる男はいる（笑）」

望「やる気出ないわね、、、」

奈「教授と思われる渋い男ならいるわ（笑）」

望「若くないでしょ？それに、きっと既婚者よね」

奈「ジジイよ（笑）。けど、なんというか、、、」

望「何よ、気を持たせて、いやらしいわね（笑）」

奈「話がしてみたい気になるジジイがいるのよ（笑）」

望「奈々子って、守備範囲広いわよね、、、」

奈「現在は、19歳から70歳までよ」

望「広っ!!!」

奈「男は年齢じゃないわ」

望「じゃあ、どこで選別するの？」

奈「色気よ（笑）」

奈々子ったら、どこまで本気なんだろう。でも、冗談は言わないタイプだ。猛は、優しい所がいたいと思ったけれど、それって皆に優しくって、逆にイライラする時もあったし。悔しいけど、笹木は色気があった。それで、多分、私はイチコロだった、、、。恋って、頭でするものじゃないし、そんな理由でいいのかもね。けど、身体でする恋も、もう沢山だわ、、、。子供時代って、身体抜きで恋愛が成立してたのにね、、、。猛、最近、ルス電ばかりだわ。もう、猛もいないのね、、、。少なくともおんなじ猛は、、、。

*朱の色を洗い弱めたような淡い赤橙色。

「洗」は、布などを洗う事によって色が薄くなる意味。

この教授、奈々子のスピンオフで書こうと考えています。

残り、1, 2回でフィナーレです。

「シガレッツストーリー」を書き上げようと思っています。

藤「詐欺だね～（笑）」

麻「この前なんか、合コンでカップル成立シーンとかいって、キスまでさせられたのに！」

藤「いい男だった？（笑）」

麻「そういう事はどうでもいい！ギャラが3000円はない！」

藤「エキストラじゃん？（笑）」

麻「時間ばかり拘束されて、3000円じゃ生活できない！」

藤「じゃあ、もう、オレと結婚しちゃう？（笑）」

麻「ふざけないで！」

藤「本気で言ってるんだけど？（笑）」

麻「そんなへらついたプロポーズ、聞いた事ない！」

藤「オレ、独占欲強いのか（笑）。たとえ仕事でも他の男とキスする女はちょっと、、、」

麻「結婚以前に付き合っていないし！私の自由！」

藤「あれ以来、他の男とした？」

麻「してないけど、、、たまたまだもん！」

藤「オレも実はしてないんだよね。嬉しい？（笑）」

麻「う、、、うれしい、、、。けど、だったら何サ！あ！やめろ！」

藤「この前は、自分から頼んだくせに（笑）」

麻「よせっ！何するっ！！！」

藤「谷間見せてる女は誘ってるんだよ？（笑）」

麻「誘ってないっ！ひゃっ！！！」

藤「いつからオレを好きだった？」

麻「うう、、、。テラちゃんと付き合ってたくせに、、、」

藤「望の笑顔を独り占めしたくない男はいないさ。家庭的だしね。で？いつから？？？」

麻「やめて。車の中だよ？（涙）」

藤「ただの車じゃないよ。ルパン三世と同じイタリア車さ」

麻「入社した時から、、、（涙）」

藤「どこで初めて見た？？？」

麻「入社試験、、、（涙）」

藤「！？どうしてそんな大事な事を言わなかった！！！」

麻「言ったらどうだったっていうの？（涙）」

藤「オレ、ワケもなく浮かれてた時期だったから、、、。けど、麻美も学生に見えたぜ？」

麻「ホラね？眼中になかったんじゃない？（涙）」

藤「お前こそ、この前の時の事ちゃんと記憶にある？」

麻「脱がされて触られた後は一切ないよ（涙）」

とっくに視覚はなくなって、煙草の匂いも消えた。聴覚も曖昧になり、やがて、触覚さえも自分の中に溶けていった。

*爽やかな緑色。「若」は若々しく新しいという意味から、鮮やかさの形容として用いられる。若竹は、青竹に比べて、より若い竹の色を表している。

中国では、四季を通じて青々と茂り、まっすぐに節目正しく成長する事から俗気なしとされた

。

百塩茶（ももしおちゃ）の望

望「結婚おめでとう、、、」

麻「けっこん??？」

望「とぼける必要ないわ。あなたの猛がそう教えてくれたんだから」

麻「私、結婚なんかしないし、あなたのタケシって、、、。名前と呼んだ事ないし」

望「しない!?断ったの!?彼は、そうは言ってなかったけど？」

麻「今は、誰ともするつもりないよ。こんなハンパな人間のままでは、、、」

望「あの人を振り回してない?(怒)」

麻「してないと思うよ?ずっと甘えては来たけど、、、」

望「男をその気にさせたのよ?(怒)」

麻「タイミングが合っていない、、、」

望「余裕なのね(怒)」

麻「テラちゃんの事だってあるし、、、」

望「私が何をしたっていうの!?(怒)」

麻「テラちゃんは、まだ赤ちゃんの件から立ち直ってないと思う」

望「偉そうな事を言うのね(怒)。だけど、それとこれが関係あるの?(怒)」

麻「フッチーは元々はテラちゃんの彼氏だから、テラちゃんが幸せになるのが先」

望「永遠に幸せにならなかったら?(怒)」

麻「私も、フッチーとはこのまま」

望「私に責任を押し付ける気!?(怒)」

麻「このままでも楽しいからいいよ?結婚して欲しいの?」

望「・・・正直なところ、、、不愉快かもしれないわ、、、」

麻「テラちゃんを不愉快にさせて、私に幸せなんてないから気にしないで?」

望「だから!私に祝福を押し付けさせようってしてない?(怒)」

麻「どっちがいいの??どっちも嫌なくせに、、、」

望「・・・ええ、、、どっちも嫌、、、。二人とも消えて?(怒)」

麻「テラちゃんがそう言うなら、もう連絡しないけど、私はいつでも待ってるからね?」

酷い。酷い。何から何まで酷い。猛は、私を呼び出して釘を刺した。正確には何か言ったわけじゃないけど、目が、麻美に手を出すなど言っていた。失礼だわ。私が何をするっていうの?麻美は、猛に本気だったなら、最初からそう言ってくれたら良かったのよ。おくびにも出さずに、付きまとうのを止めなかった挙句に横取り。

奈「結局、ホントに手を出したじゃないの(笑)」

望「いつ!？」

奈「麻美は何もしてないのに、ケンカ売った(笑)」

望「奈々子なら、麻美を憎いと思わないの？」

奈「たまたま同じ男を好きになっただけというか、、、」

望「か？」

奈「望は、お買い得な男として付き合った、、、」

望「素敵な人よ？（怒）」

奈「知ってる。が、私はタイプじゃない男とは寝ない」

望「私、本気だったわよ？（涙）」

奈「それも知ってる。けど、巣作りするメスみたいな感覚でね」

望「よくもそんな酷い事が言えるわね？（涙）」

奈「いけないって言ってないでしょ？ただ、彼を最終的に動かしたのは麻美だわ」

望「ひどい、、、（泣）」

奈「現実にして真実」

望「あなたとも、これっきりね（涙）」

奈「私は、いつも望の味方のつもりよ？」

望「どこがよ！？（怒）」

奈「敵と味方の判別もつかなくなったら人間は終わり。いつでも待ってるわ」

このワイン、甘っちょろいわね、、、。私がいなくなっても、地球は滅びない。悔しい事ね、、、。

麻「テラちゃん！？どうした！？また何かあった！？」

望「麻美、、、（泣）」

麻「うん、うん。私は、ここにいるよ？」

望「麻美、、、（泣）」

麻「待ってて。すぐに行くからね！」

麻美。違うの。そうじゃないの。大丈夫よ。全然そうじゃないのよ。そうじゃないの、、、。
ああ、、、この時間は、とても静かだわ、、、。

*何度も染め重ねた濃い茶色。

百は、回数が多い意味。塩は、漬けるという意味。

茜色（あかねいろ）の望

麻「だいじょぶ！！！」

望「いつもありがとう、麻美」

麻「寒くない？」

望「ちっとも寒くないの。心が（笑）」

麻「????」

望「酔い潰れて夢をみたわ」

麻「怖い夢じゃなかったのね？」

望「う～ん、、、ある意味、コワイ（笑）」

麻「でも、大丈夫だったんだね？」

望「高層ビルから飛び降りようとしたら、知らない女の子が隣に立ってるのに気付いた」

麻「いろんな意味で怖いよ、、、（涙）」

望「ええ（笑）。で、その子が言ったの。もうちょっとだから頑張ってるって」

麻「飛び降りる方を？（涙）」

望「顔がね、、、踏みとどまる方って感じだった。無垢な顔だったわ」

麻「知らない子だよな？」

望「知ってる気がしたわ。私、そうねと思って目が覚めたのよ、実際にも」

麻「・・・言ってもいいかな？」

望「分かってる。私の赤ちゃんだったのよね？」

麻「うん（号泣）」

望「天使になるって話、本当だったのね、、、」

麻「うん、うん（号泣）」

望「今まで知らなかった類の涙が流れたけど、気持ちがスッと楽になったわ」

麻「赤ちゃんは、テラちゃんの味方だからね？（泣）」

望「麻美とフッチーもね（笑）」

麻「そう言ってくれるのね？（涙）・・・そのフッチー、外でハラハラしているんだけど、、、」

望「！？きっと、エンジン切ってるわ！呼んで来てあげて？」

藤「望！カーテン開けて！」

望「！？わあ～っ！綺麗、、、。うっ、さむっ（笑）」

藤「君、自分が赤ちゃんみたいな顔してるよ（笑）」

麻「春は、曙、、、」

藤「二人とも、見逃すなよ？どンドン色が変わるから。気付いた時は、いつもの朝だ」

望「フッチー、、、麻美の方が相性が良かった？」

藤「望は、特上の寿司で、麻美はオムライスかな」

麻「ずいぶんじゃない！？（怒）」

藤「どっちも捨て難いけど、オレ、オムライスで一生満足できそうなんだよね（笑）」

麻「野望が小さくっていいわけ？（怒）」

藤「特上は、オレなんか必要ないさ。オムライスファンしててやらなきゃ（笑）」

望「肯定するのは気が引けるけど、分かるわ、、、。それで私は残るのね（笑）」

藤「いい意味で貪欲な男なら、望を旨いと食うさ（笑）」

麻「えっ！？ひょっとして、カラダの話なの！????」

藤「それも、ある、、、というか否めない（笑）」

望「素直に嬉しいわ（笑）。女だって、カラダをホメられたら悪い気しないもの（笑）」

麻「どっちのカラダも知ってるぜ的なスケベな言い方はよせ！（怒）」

藤「麻美も望とヤレば釣り合い取れるんじゃない？（笑）」

望「これ以上、麻美を怒らせないで？（笑）それより、前から聞いたかったんだけど、、、」

藤「おお～！この際、何でも吐くぜ？（笑）」

望「あなた、、、西洋人の血が混じってない？」

藤「・・・どうして、そう思った？」

望「協調性があり過ぎるわ。奥の方では意志が強くてキツイ。個人主義で冷たい感じよ？」

藤「イヤな目にあって来たから隠してたけど、クウォーターだよ、、、」

麻「なに人！！！」

藤「日本人って、日本人じゃないだけでそうだろ？（怒）」

麻「違うよ！日本人にしては、髪や目の色がおかしいと思ってたんだよ！」

藤「それが差別だと言っているんだよ。単一民族には理解できないだろうけど」

望「分かるわ、、、。だから、聞いちゃいけないかなって感じてたの」

藤「やっぱり、特上の女は一味違うな（笑）」

麻「私だって、フッチーの協調性はどっかムリしてるって気付いてたのに、、、」

藤「ロシア人だよ。ロシア語もできないし、オレのルーツって曖昧なのさ」

望「弱気にならないで？そうだ！奈々子にもこの空を見せようか？」

麻「急いで、テラちゃん！」

朝焼け？しょうっちゅう見ているわ。だけど、友達と見る朝焼けは格別だったでしょうね。関係、修復できたようね。良かったわ。望、ちょっと躁状態だったみたいで、反動が心配だけど、できるだけマメに電話する事にしよう。これ以上、誰かに死なれるのは真っ平。朝焼けなんて、だから何？って感じだけど、見れば分かるわよね。確かに何かのチカラを秘めてる。田舎の空は澄んでいて、でっかいサクランボみたいなお日様が昇る。オレンジの空も、紫の雲も、西の空のまだ夜のところも全部が好きだわ。

新しい朝が来る度に、要らない感情は少しずつ浄化されて行くはずよね。

もう若くない。でも、まだこんな歳。

何年後かの自分の為に、せっせと種を蒔こう。

きっと芽が出ると信じて。

今見ている世界は、私の咲かせた花なのだから。

F i n

*目の覚めるような鮮やかな赤色

日や火の色に通ずるという考え方から、強い生命力を保ち続けるという色

皆様、ありがとうございました。解説中！も併せて読んで下さると嬉しいです。

奈々子の独白で終わらせました。彼女のスピノフを考えており、それは会話文が主体ではない可能性が高いです。望や麻美も登場します。今度は、恋ではなくて、愛について描けたらいいなと思っています。

ホンモノの愛を知る事は、そう誰にでも許されていないと、かの詩人も言うております。誰にでも、愛する対象がある感じですけど。それは、愛なのか！？と聞かれて、そうだ！と答えるってみっともないとしたら、、、それがホンモノじゃないとしたら、、、コワイですね～。ゆるふわな時代に、ディープなものばかり書きたい自分（笑）。

コアな読者の方々、よろしくお願い致します！